宿木

1 御まへのきくうつろひはてゝさかりなるころ（一七〇三3・35）
秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば（古今集巻五、秋下、二五九、仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れとおほせられければよみて奉りける　平さだふん・古今六帖第六、きく、三四九六、千里）〔花〕〔湖〕白菊の〔第三句〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔対〕〔事〕〔大〕

2 霜にあへずかれにしそのゝ菊なれどのこりの色はあせずもある哉（一七〇三5・37）
①しぐれつゝかれゆく野辺の花なれど霜の籬に匂ふ色かな（新古今集巻六、冬、六三一、うへのをのこども菊合せし侍りける次でに　延喜御歌）〔花〕〔孟〕残る色かな、〔岷〕〔大〕
②引き初めて世々もへにける松なれど緑の色のあせずもあるかな（能宣集、一二〇四、同じ山寺にて法師の松引きにさそひ侍るにまうでたりし室の前に大いなる松の木のもとにて昔住みける人のひきける松なりこゝにゐて侍らむと申し侍りしに）〔花〕〔孟〕〔岷〕

3 水もるまじく思さだめんとても（一七〇六2・38）
①などてかく逢ふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを（伊勢物語、七六）〔河〕成ぬらん〔不本成けん〕、〔孟〕なりぬらん……契し物を、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
②堤をば豊浦の宮につきそめてよゝをへぬれど水は洩さず（新勅撰集巻七、賀、四九一、豊御食炊屋姫天皇　貞信公）〔河〕〔孟〕、〔屋〕水はもらさじ、〔岷〕〔湖〕〔大〕

4 かねてよりならはしきとえ給ふをもたゞつらきかたにのみぞ思をかれ給ふべき（一七〇7・43）
かねてよりつらさを我にならはさでにはかにものを思はするかな（未詳）〔河〕（上句ノミ、「つらき心を」）、〈弄〉、〔一〕〔湖〕つらさを人に、〔休〕、〔紹〕つらさを人の、〔孟〕つらきを人に、〔岷〕つらき心を、〔引〕つらさを君に、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

5 こゝろにとまるほだしになるばかりなる事はなくて（一七二14・45）
世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ（古今集巻六、雑下、九五五、おなじ文字なき歌　物部よしな）〔事〕

6 あさがほのはかなげにてまじりたるを猶ことにめとまる心地し給あくるまさきてとかつねなきよにもなずらふるが（一七一三4・45）
あさがほはつねなき花の色なれやあくるまさきてうつろひにけり（未詳）〔花〕〔弄〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

7 をみなへしをばみすぎてぞいで給ぬる（一七一四1・47）
①女郎花うしと見つゝぞ行き過ぐる男山にしたてりと思へば（古今集巻四、秋上、二三、僧正遍昭が許に奈良へまかりけ

る時に男山にて女郎花を見てよめる　布留今道・古今六帖第六、女郎花、三四三〇、ふるのいまみち）〔花〕〈弄〉〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕（上句ノミ）、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

②秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時（古今集巻十六、雑体、一〇一六、題しらず　僧正遍昭・古今六帖第六、女郎花、三四三〇・遍昭集、一八九〇）〔評〕〔集〕

8 あさまだきまだきにけりと思ひながら人めして（一七一四3・47）朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風の後めたさに（拾遺集巻一、春、三九、題しらず　兵部卿元良親王）〈弄〉〔引歌までもなし〕、〈細〉〔引歌にをよばず〕、〈新〉

9 なにゝかゝれるといとしのびてこともつづかず（一七一六8・50）藤波に松の嵐の音せずは何にかゝれる花としらまし（未詳）〔最〕、〔花〕〔休〕花と見てまし、〈細〉〔引歌かなはざる歟〕、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕〔大〕

10 庭もまがきもまことにいとゞあれはてゝ侍しに（一七一六11・50）里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる（古今集巻四、秋上、二四八、仁和の帝みこにおはしましけるときふるの滝御覧ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりておほむ物語のついでによみて奉りける　僧正遍昭・古今六帖第二、やど、三一七、僧正遍昭・遍昭集、一八八四）〔奥〕〔紫〕、〔異〕宮もまがきも、〔河〕〔一〕、〔休〕（初句ノミ）、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

11 よのうきよりはなど人はいひしをも（一七一八4・51）山里はものの寂しきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけれ（古今集巻十六、雑下、九四四、題しらず　読人しらず・小町集、一九七九・和漢朗詠集巻下、山家、五六三、「ものさびしかる」）〔釈前〕物さびしかる、〔奥〕〔異〕物わびしかる、〔紫〕〔河〕、〔弄〕（第二句ノミ）、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕物のわびしき、〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

12 いくよしもあらじをみたてまつらむ程は（一三〇3・54）幾世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひ乱るゝ（古今集巻六、雑下、九三四、題しらず　読人しらず・古今六帖第三、藻、三七〇四）〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

13 おほ空の月だにやどるわがやどに待よひ過てみえぬきみかな（一三〇13・54）大空の月だに宿にいるものを雲のよそにも過ぐる君かな（元良親王御集、三三七四、前わたりし給ひければ女にこの月はいかと聞こえたりければ女）〔花〕〔一〕〔細〕〔孟〕月だに宿と、〔弄〕（上句ノミ、「月だに入てやどれるを」）、〔休〕、〔紹〕月だに宿と……過る春かな、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 よろづに契りなぐさめてもろともに月をながめておはする程（一三一3・55）我が心なぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て（古今集巻十七、雑上、八七八、題しらず　読人しらず・古今六

帖第一、雑の月、三一六、大和物語、七二）〔湖〕〔引〕、〔新〕
（第二句ノミ、〔事〕〔評〕〔集〕

15 いまいとゝくまいりこんひとり月なみたまひそ（一三一7・55）
①今こむといひしばかりに長月の有明のつきを待ち出つるかな（古今集巻十四、恋四、六九一、題しらず　素性法師・古今六帖第五、人をまつ、三三六三、素性、「云ひてばかりに」・素性法師集、一五七一五）（一）（第二句ノミ）
②大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの（古今集巻十七、雑上、八七九、題しらず　業平朝臣・伊勢物語、一七・古今六帖第一、雑の月、三三三七・業平集、一六一五七）（孟）〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
③ひとり寝のわびしきままに起きゐつゝ月をあはれといみぞかねつる（後撰集巻十、恋三、六五五、月をあはれといふはいむなりといふ人の有りければ　読人しらず・小町集、一九〇四、中たえたる男の忍びて来て隠れてみけるに月のいと哀なるをみてねむことこそいと口惜しけれとすのこに詠むれば男いむなるものをといへば）〔岷〕わびしき時は、〔事〕〔大〕〔集〕

16 心そらなればいとくるしきときこえをき給て（一三一7・55）
徘徊り往箕（たもとほ　ゆきみ）の里に妹を置きて心空なり土は踏めども（万葉集巻十一、二五四一）〔全〕〔対〕〔大〕

17 たゞ枕のうきぬべき心ちすれば心うき物は人の心也けりと（一三一9・55）
①涙川みづまさればやしきたへの枕のうきて止まらざるらむ（拾遺集巻十九、雑恋、一三五、忠君宰相まさのぶがむすめにまかり通ひてほどなくてうどゞもをはこび返しければぢんの枕をそへて侍りけるを返しおこせたりければ　読人しらず）〔花〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
②ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり（古今六帖第五、まくら、三四〇八七）〔拾〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

18 をのづからながらへばなどなぐさめんことを思ふにさらにをば捨山の月すみのぼりて（一三一8・56）
我が心なぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て（古今集巻十七、雑上、八六八、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、雑の月、三一六・大和物語、七二）〔釈前〕、〔奥〕〔上句ノミ、〔紫〕、〔異〕すむ月をみて、〔河〕〈花〉〔一〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕、〔引〕（第二句ノミ、〈新〉〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

19 こよひはさもおぼえずしゐの葉のをとにはをとりておぼゆ（一三一11・56）
①忘るとは恨みざらなむはしたかのとかへる山の椎はもみぢず（後撰集巻十六、雑二、一二七、女の許より恨みおこせて侍りける返事に　読人しらず）〔紫〕〔異〕
②はし鷹のとがへる山の椎柴の葉がへはすとも君はかへせじ（拾遺集巻十九、雑恋、一三〇、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕
③家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る（万葉集巻二、一四二、有間皇子）〔紫〕〔異〕、〔河〕〔孟〕〔屋〕家

にては、〔岷〕家にては〔引〕歌に及ばず〕

20 月みるはいみ侍るものを（一七三13・56）

①大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの（古今集巻十七、雑上、八五六、題しらず　業平朝臣・伊勢物語、一七七・古今六帖第一、雑の月、三三七・業平集、一六一七）〔紫〕〔異〕〔紹〕〔事〕

②ひとり寝のわびしきままに起きゐつつ月をあはれと忌みぞかねつる（後撰集巻十、恋三、六六五、月をあはれといふはいむなりといふ人の有りければ　読人しらず・小町集、一九六〇四、中たえたる男の忍びて来て隠れてみけるに月のいと哀なるをみてねむことそいと口惜しけれとすのこに詠むれば男いむなるものをといへば）〔異〕わびしき時を……いみぞかねぬる、〔河〕〔湖〕わびしき時は、〔一〕、〔細〕〔紹〕いみぞかねぬる、〔休〕〔孟〕、〔屋〕さびしき時は、〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕

21 秋のよなれどふけにしかばにや程なくあけぬ（一七三14・58）長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば（古今集巻十三、恋三、六三六、題しらず・凡河内躬恒・小町集、一九五八一、かへし・古今六帖第五、ふせり、三三七〇、みつね）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕、〔湖〕（上句ノミ）、〔引〕〔対〕

22 おもがくしにやなどかくのみなやましげなる御けしきならむ（一七四12・59）相見ては面隠さるるものからにつぎて見まくのほしき君かも（万葉集巻十一、二五四四）〔拾〕むかへればおもがくしする

23 なをはれ〳〵しからぬはみぐるしきわざかな（一七四14・59）牽星（ひこぼし）の思ひますらむ情（こころ）より見るわれ苦し夜のふけゆけば（万葉集巻八、一五四四、湯原王・古今六帖第一、七日の夜、三一〇四一、湯原王、「事よりも」（第三句）・拾遺集巻三、夏、一四七、題しらず　湯原王、「事よりも」）〔拾〕

24 げにこの世はみじかゝめるいのちまつまもつらき御心にみえぬべければ（一七五10・60）ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく思はずもがな（古今集巻十六、雑下、九六五、つかさとけて侍りける時よめる　平貞文・大和物語、六七七、「歎かずもがな」）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕、〔異〕㋐〔湖〕歎かずもがな、〔異〕㋑ながゝらぬ……程だにも、〔河〕、〔弄〕（初句ノミ）、〔一〕（第二句ノミ）、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

25 なをこりずまに又もたのまれぬべけれとて（一七五11・60）こりずまに又もなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にし住まへば（古今集巻十三、恋三、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕、〔河〕（上句ノミ）、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

26 身を心ともせぬありさまなりもし思ふやうなる世もあらば（一七六8・61）いなせとも言ひ放たれず憂きものは身を心ともせぬよなりけり（後撰集巻十三、恋五、九三八、親の護りける女をいなともせとも言ひ放てと申しければ　伊勢・伊勢集、一八二〇）

〔奥〕〔湖〕〔上句ノミ〕、〔紫〕、〔異〕心ともせぬ我がよなりけり、〔河〕＜弄＞、〔休〕〔第二句ノミ、「おもはざりけり」〕、〔紹〕、〔孟〕いかにせば、〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

27 いのちのみこそなどの給ふ程にかしこにたてまつり給へる（一三六11・61）

えぞしらぬいまこころみよ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと（古今集巻八、離別、三七、紀のむねさだがあづまへまかりける時に人の家に宿りて暁いでたつとてまかり申しければ女のよみて出せりける　読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三九二）〔弄〕〔孟〕〔第二句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

28 あまのかるめづらしき玉もにかづきうづもれたるをさなめりと（一三六13・61）

何せむにへだのみるめを思ひけむ沖つ玉もを潜く身にして（後撰集巻十五、雑一、一二〇〇、志賀の唐崎にてはらへしける人のしもづかへにみるといふ侍りけり、大伴黒主そこにまできてかのみるに心をつけていひ戯ぶれけり、はらへはてゝ車より黒主に物かづけゝる其裳のこしにかきつけてみるに送り侍りける　黒主・古今六帖第五、裳、三四一〇四）〔花〕

＜弄＞、〔一〕〔下句ノミ〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕、〔引〕なにゝこの……かづきけん、〔新〕

29 身づからの心にもあまりにならはし給うてにはかにはしたなかるべき（一三六1・62）

かねてよりつらさを我にならはさでにはかにものを思はするかな（未詳）〔屋〕

30 日ぐらしのなく声に山のかげのみこひしくて　大かたにきかましものを日ぐらしの声うらめしき秋のくれかな（一三六12・63）

ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける（古今集巻四、秋上、二〇四、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、ひぐらし、三四八五、「見えしは山の」）〔河〕

＜弄＞、〔細〕思へば山の、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

31 あまもつりするばかりになるもわれながらにくき心かなと（一三六14・63）

恋せじとねをのみなけばしきたへの枕の下にあまぞ釣する（未詳）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕恋をして、〔河〕恋をして（真本恋せじと）、

＜弄＞〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔事〕

32 おしからねどかなしくもあり又いとつみふかくもあなるものを（一三七4・64）

惜しからで悲しきものは身なりけり浮き世を捨てむ方しなければ（古今六帖第四、うらみ、三九六六、貫之）〔異〕かたをしらねど

33 ふかゝらずうへはみゆれどせきがはのしたのかよひはたゆる物かは（一三三10・67）

浅くこそ人は見るらめ関川のたゆる心はあらじとぞ思ふ（大和物語、六二・元良親王御集、三三五七、又）〔異〕、〔花〕

〔一〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕人はみるとも、〈弄〉、〔休〕〔紹〕人はみるとも……下の通ひは絶る物かは、〔事〕〔大〕〔評〕

34 げにおやにては心もまどはし給つべかりけり（一七三12・68）

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな（後撰集巻十五、雑一、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに　兼輔朝臣・古今六帖第二、親、三三七、「迷ひぬるかな」・大和物語、一三一・兼輔集、一六六、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〔紫〕、〔異〕〔初句ノミ〕、〔河〕〔上句ノミ〕、〔孟〕〔第二句ノミ〕、〔岷〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

35 たゞ世やはうきなどやうにおもはせてことずくなにまぎらはしつゝ（一七七8・72）

①世やは憂き人やはつらきあまの刈る藻に住む虫のわれからぞ憂き（未詳）〔紫〕〔河〕〔弄〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②世やは憂き我が身のみこそうかりけりされば人をも何か恨みん（未詳）〔異〕

③あまのかる藻に住む虫の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ（古今集巻十五、恋五、八〇七、題しらず　典侍藤原直子朝臣・伊勢物語、一三五・古今六帖第三、われから、三七三九、内侍のすけきよいこ）〔新〕

36 すこしもたがひめありて心かろくもなどおぼしものせんに（一七七12・72）

出でゝいなば心かるしといひやせむ世のありさまを人は知らねば（伊勢物語、一三・古今六帖第四、かなしび、三三三六、業平、「人は知らずて」）〔新〕心かろしと……世のうき事を

37 すぎにしかたのやさしさをわするゝおりなくものにもがなやととりかへさまほしきと（一七八2・73）

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ（未詳）〔紫〕〔異〕、〔河〕〔休〕〔上句ノミ〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕〔湖〕〔新〕〔第二句ノミ〕、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

38 かくやすからずものを思ふ事とくやしきにも又げにねはなかれけり（一七九12・75）

①習はねば人の間はぬもつらからで悔しきにこそ袖は濡れけれ（新古今集巻十五、恋五、一三九六、忠盛朝臣かれ〳〵になりて後、いかゞ思ひけむ、久しく音づれぬ事を恨めしくやなどいひて侍りければ返事に　前中納言教盛母）〔紫〕〔河〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕つらからず……音はなかれけれ、〔異〕つらからず、〔休〕〔孟〕〔対〕〔事〕

②神山の身を卯の花のほととぎすくやし〳〵と音をのみぞ泣く（古今六帖第五、雑の思、三三三九）〔湖〕〔拾〕〔新〕〔玉〕〔事〕〔大〕〔集〕

39 わりなくしのびありかん程も心づくしに（一八〇12・76）

木の間よりもりくる月の影みれば心尽くしの秋はきにけり

（古今集巻四、秋上、一八四、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、秋の月、三二七）〔評〕

40 いまのまもこひしきぞわりなかりけるさらにみではえあるまじく（一五四14・76）

あはざりし時いかなりし物とてかただ今の間も見ねば恋しき（後撰集巻九、恋一、五六四、題しらず　読人しらず）〔拾〕〔新〕〔事〕〔大〕

41 御けしきの心うさはことはりしらぬつらさのみなん（一五一8・76）

身をしれば恨みぬものをなぞもかくことはりしらぬ涙なるらむ（未詳）〔釈前〕、〔紫〕なぞもこの……つらさなるらん、〔異〕〔河〕、＜弄＞〔引歌までもなし〕、〔一〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕つらさなるらん（第五句）、〔休〕、＜紹＞〔引不及〕、〔全〕〔対〕〔評〕〔集〕

42 おもひます人なき心のとまりにてこそはあらめなど（一五一5・77）

思ひます人しなければます鏡うつれる影と音をのみぞ鳴く（拾遺集巻十四、恋四、九一六、題しらず　よみ人しらず）〔拾〕〔新〕

43 猶いとうき身也けりとたゞきえせぬほどはあるにまかせて（一五三13・78）

憂きながら消えせぬものは身なりけりうらやましきは水の泡かな（拾遺集巻三十、哀傷、一三三、うまごに後れ侍りて中務）〔釈前〕、〔奥〕（上句ノミ）、〔紫〕水のあはかは、〔異〕〔河〕〔孟〕、〔屋〕世なりけり（第三句）、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔事〕〔大〕

44 かくのみことよきわざにやあらむとあながちなりつる人の御けしきも（一五四6・78）

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ごとにして（古今集巻十四、恋四、七二一、題しらず　読人しらず・猿丸大夫集、一五〇一、あだなる人のさすがに頼めばつれなくのみあれば恨みて詠める、「皆人は……相も思はず」）〔引〕

45 われこそさきになどかやうにうちそむくきはゝ（一五四9・79）

人よりは我こそ先に忘れなめつれなきをしも何か頼まむ（古今六帖第四、恨みず、三九四四）〔花〕人なれば……忘れなめや、〔弄〕〔一〕何たのみけむ、〔細〕〔休〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕人なれば、〔孟〕人なれば……なにたのみけん、〔屋〕人がれは、〔引〕人がれは……何たのみけん、〔拾〕、〔玉〕（第二句ノミ）、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

46 みなれぬる中のころもとたのめしをかばかりにてやかげはなれなん（一五四1・80）

①衣だに中にありしは疎かりき逢はぬ夜をさへ隔てつるかな（拾遺集巻十三、恋三、七九八、題しらず　よみ人しらず）〔河〕〔余〕

②春過ぎて散りはてにける梅の花ただかばかりぞ枝に残れる（拾遺集巻十六、雑春、一〇六三、ひえの山に住み侍りける頃人のたき物をこひて侍りければ侍りけるまゝにすこしを梅の花のわづかに散り残りて侍る枝につけて遣はしける　如覚

法師・高光集、一四四・小大君集、一六二四）〔玉〕

47 うちなげきてゐなをり給ほどもげにぞしたやすからぬ（一三三14・86）

水鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水も氷らざりけり（拾遺集巻四、冬、三七、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕、〔岷〕〔引歌及ざるなり〕、〔湖〕〔引〕、〔拾〕〔新〕ぬるむべらなり

48 げにたれもちとせのまつならぬよをと思ふにはいと心ぐるしく（一三三5・88）

憂くも世に思ふ心にかなはぬか誰も千年の松ならなくに（古今六帖第四、うらみ、三四八）〔釈前〕心にものゝかなはぬは、〔奥〕〔河〕〔一〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕うくも世の、〔紫〕、〔異〕かなはぬは、〔弄〕〔初句ノミ、「うくも世の」〕、〔休〕〔紹〕うくも世の……かなはぬは、〔岷〕、〔引〕うくも世の心に物の、〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

49 さらにほかざまにはなびくべくもはべらざりけり（一三三1・88）

ほかざまに塩焼く煙なびかめやよももかたより風は吹くとも（未詳）〔異〕

50 かぎりだにあるなど忍びやかにうちずむじて（一三四2・90）

恋しさのかぎりだにある世なりせば年へてものは思はざらまし（古今六帖第五、としへていふ、三四一七・是則集、一六七四・続古今集巻十四、恋四、一三四）〔釈前〕、〔奥〕〔上句ノミ〕、〔紫〕〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕つらきをしゐてなげかざらまし、〔弄〕〔初句ノミ、〔一〕つらきをしゐて恨ざらなん、〔玉〕〔第二句ノミ、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

51 をとなしのさともとめまほしきを（一三四3・90）

恋わびぬねをだになかむ声たてていづれなるらむ音なしの里（拾遺集巻十二、恋二、七六、題しらず　読人しらず・古今六帖第二、里、三三五、「いづれなるらむ音なしの里」）〔釈前〕〔一〕〔休〕〔紹〕いづくなるらん、〔奥〕いづらなるらむをとなしの滝、〔紫〕〔細〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕いづこなるらん、〔異〕音をだにやすく……いづこなるらん、〔河〕いづくなるらん（真本いづこ）、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔孟〕〔屋〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

52 あはれなる御ねがひに又うたてみたらしがはちかき心地する（一三四6・90）

恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな（伊勢物語、一三四・古今集巻十一、恋一、五〇一、題しらず　読人しらず、「神はうけずぞなりにけらしも」）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔孟〕〔屋〕〔初句ノミ〕、〔一〕＜細＞〔休〕〔紹〕〔岷〕、〔湖〕〔上句ノミ〕、〔引〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

53 人のしのぶぐさつみをきたりけるなるべしとみしりぬ（一三三13・92）

結びおきし形見の子だになかりせば何にしのぶの草を摘まましし（後撰集巻十六、雑二、一二八七、兼忠朝臣の母みまかりにければ兼忠をば故枇杷左大臣の家にむすめをばきさいの宮

にさぶらはせむとあひ定めて二人ながらまづ枇杷の家に渡し送るとてくはへ侍りける　兼忠朝臣の母のめのと・古今六帖第五、かたみ、三元七九）〔奥〕（上句ノミ）「むすびをく」）、〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕むすびをく、〔弄〕（第二句ノミ、「むすびをく」）、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

54 よをうみなかにもたまのありか尋ねには心のかぎりすゝみぬべきを（一七五六4・92）

しるべする雲の舟だになかりせば世を海中に誰か問はまし（伊勢集、一八一六〇）〔引〕月の舟だに……誰かたづねん

55 いつと侍らぬなるにも秋の風は身にしみてつらくおぼえ侍て（一七五八9・95）

①いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり（古今集巻十一、恋一、五四六、題しらず　読人しらず・小町集、一九六六、「あやしかりけり秋の夕暮」）〔紫〕〔異〕なければもあやしかりけり秋の夕ぐれ

②秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかり哀れなるらむ（和泉式部集、四〇三六、風）〔河〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕人の恋しき（第五句）、〔休〕かなしかるらん、〔孟〕いかなる風の色なれば……人のこひしき、〔引〕〔大〕〔評〕〔集〕

56 をくれさきだつほどは猶いといふかひなかりけり（一七五九1・95）

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ（古今六帖第一、雫、三四四〇・遍昭集、一八七九、世のはかなさいとう思ひしられて侍りしかば・和漢朗詠集巻下、無常、五九〇、良僧正）〔紫〕〔異〕〔孟〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

57 心うき命の程にてさまゞ〳〵の事をみ給へすぐし思ひ給へしり侍るなん（一七六一5・98）

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき（古今集巻十九、雑体、一〇六三、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三〇三六、「事もやさしく」）〔河〕（上句ノミ）、〔休〕〔孟〕

58 残るこずゑもなくちりしきたるもみぢをふみわけゝる跡もみえぬをみわたして（一七六四3・101）

秋は来ぬもみぢは宿にふりしきぬ道踏み分けてとふ人はなし（古今集巻五、秋下、二八七、題しらず　読人しらず）〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

59 いとゞみねのあさぎりにまどひ侍つる（一七六五1・102）

雁のくる峯のあさ霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ（古今集巻十六、雑下、九三三、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、霧、三三二一、「世の中のうき」）〔紫〕、〔河〕（上句ノミ）、〔弄〕（初句ノミ）、〔細〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

60 ことさらに又いはほのなかもとめんよりは（一七六九・103）

いかならむ厳の中に住まばかは世の憂き事の聞こえこざらむ（古今集巻十六、雑下、九三二、題しらず　読人しらず・古今六帖第二、いはほ、三八七六、「住まへばか……尋ね来ざらむ」）〔奥〕〔河〕（上句ノミ）、〔紫〕〔異〕、〔弄〕（第二句ノミ）、

〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

61 おばなのものよりことにててをさしいでまねくがおかしくみゆるにまだほにいでさしたるも露をつらぬきとむる……ほにいでぬもの思ふらししのすゝきまねくたもとの露しげくして（一七六五11・103）

秋の野の草の袂か花すゝきほに出でゝ招く袖と見ゆらむ（古今集巻四、秋上、二四三、寛平の御時きさいのみやの歌合の歌　在原むねやな・古今六帖第六、すゝき、三五四四、在原のむねやな・寛平御時后宮歌合、三五四三、在原棟梁）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

62 わが身ひとつのとてなみだぐまるゝが（一七六六7・104）

①大方のわが身一つの憂きからになべての世をもうらみつるかな（後撰集巻十七、雑三、一三三、題しらず　読人しらず、「あすか川（初句）……淵瀬故」・拾遺集巻十五、恋五、九五三、題しらず　貫之）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕（第二句ノミ）、〔一〕〔細〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

②世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか（古今集巻十六、雑下、九四八、題しらず　読人しらず）〔異〕

63 菊のまだよくうつろひはてゞわざとつくろひたてさせ給へる（一七六六10・104）

秋をおきて時こそありけれ菊の花移ろふからに色の勝れば（古今集巻五、秋下、二七六、仁和寺の菊の花めしける時に歌そへて奉れとおほせられければよみて奉りける　平さだふん）〔細〕（下句ノミ）

64 いせのうみうたひ給ふ御声のあてにおかしきを（一七六七11・105）

伊勢の海の　清き渚に　しほがひに　なのりそや摘まん貝や拾はんや　玉や拾はむや（催馬楽、伊勢の海、一〇）

＜釈前＞＜奥＞〔紫〕〔異〕〔河〕＜細＞〔紹〕＜孟＞〔岷〕＜湖＞〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

65 御門ときこゆれど心のやみはおなじことなんおはしましける（一七四四3・112）

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな（後撰集巻十五、雑一、一〇三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじ侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに　兼輔朝臣・古今六帖第二、親、三三七三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六三五、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言）〔紫〕〔引〕〔全〕＜対＞〔事〕〔評〕〔集〕

66 おりつればとかやいふやうにうぐひすも尋ねきぬべかめり（一七七六13・115）

折りつれば袖こそにほへ梅の花ありとやここにうぐひすのなく（古今集巻一、春上、三、題しらず　読人しらず・伊勢集、一五三八）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕（第三句ノミ）、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

67 うぐひすも尋ねきぬべかめりなどわづらはしがる（一七六13・115）

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける（古今集巻一、春上、三三、題しらず　読人しらず・兼輔集、一六三九、いと忍びたる移香の人しるばかりありければその文に、「かにぞしみぬる」）〔新〕

68 よろづよをかけてにほはん花なればけふをもあかぬ色とこそみれ（一七〇1・118）

かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてしのべる藤波の花（新古今集巻三、春下、一六三、飛香舎にて藤花の宴侍りけるに　延喜御歌）〔紫〕、〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕かけてにほへる、〔休〕、〔紹〕〔引〕みるべかりけれ……かけてにほへる、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

69 きみがためおれるかざしはむらさきのくもにをとらぬ花のけしきか（一七〇2・118）

①紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなるやどのしるしなるらむ（拾遺集巻十六、雑春、一〇六九、左大臣のむすめの中宮の寮にてうじ侍りける屏風に　右衛門督公任・前大納言公任卿集、三三〇〇、人の家に松にかゝれる藤をみる）〔河〕〔孟〕〔岷〕〔大〕

②藤の花宮のうちには紫のくもかとのみぞあやまたれける（拾遺集巻十六、雑春、一〇六八、延喜の御時藤壺の藤花の宴せさせ給ひけるに殿上のをのこども歌つかうまつりけるに皇太后宮権大夫国章）〔休〕〔孟〕〔岷〕〔大〕〔集〕

70 大殿のきみあなたうととうたひ給へる声ぞかぎりなくめでたかりける（一七〇6・118）

あな尊と　今日の尊とさ　や　昔も　はれ　昔も　斯くや　ありけむ　や　今日の尊さ　あはれ　そこよしや　今日の尊さ（催馬楽、あな尊と、二六）〔異〕〔引〕〈新〉〔対〕〔評〕〈集〉

71 さてれいのくち木のもとをみ給へ過んが（一七一10・119）

形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ（古今集巻十一、雑上、八三三、女どもの見て笑ひければよめる　兼芸法師・古今六帖第二、法師、三三〇〇、けうぜい法師）〔河〕（第三三句ノミ）、〔孟〕（初句ノミ）

72 あらましきあづまおとこのこしにものおへるあまたぐして（一七一11・119）

夏かりのみつましたえの腰にをへるみをやなぐひのやさしとぞ思ふ（未詳）〔異〕

73 御ぞのなれはぬぎをきてなをしさしぬきのかぎりをきて（一七一9・120）

おとせぬは苦しき物を身にちかくなるとていとふ人もありけり（和泉式部集、四〇四六、ある人人ものいひにきて、単衣の鳴りければぬぎおきて出でにけるつとめて・詞花集巻六、雑上、三三三、忍びたる男の鳴りける衣をかしがましとておしのけゝればよめる　和泉式部）〔拾〕

74 いづみ川のふなわたりもまことにけふはいとおそろしくこそありつれ（一七一12・122）

都いでゝ今日みかのはら泉がはかは風さむし衣かせやま（古今集巻六、羇旅、四八、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、雑の衣、三四一七）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

75 かほどりの声も聞しにかよふやとしげみをわけてけふぞたづぬる（一七八1・127）

①かほ鳥のまなくしばなく春の野の草のねしげき恋もするかな（古今六帖第六、かほどり、三三三八・万葉集巻十、一八九七、「恋もするかも」）〔紫〕〔異〕、〔河〕〔紹〕草の根しげる、〔一〕草ねのしげき、〔休〕草ねにしげき、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔事〕

②夕されば野べになくてふかほ鳥の顔に見えつゝ忘られなくに（古今六帖第六、かほどり、三三三〇）〔河〕〔紹〕野べに鳴くなる、〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕

③春のゝに鳴くかほ鳥の声たてゝいたくはなかじ人しりぬべみ（未詳）〔河〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

東　屋

1 つくばやまをわけみまほしき御心はありながらは山のしげりまであながちに思いらむも（一七九三1・131）

筑波山は山しげ山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり（重之集、二〇〇四、百首の歌重之帯刀にてはべりし時春宮に歌召しければ、恋十首）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔一〕（下句ノミ、＜休＞〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

2 こゑなどほと〳〵うちゆがみぬべく物うちいふすこしだみたるやうにて（一七四8・132）

あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ（拾遺集巻七、物名、四二三、したゞみ　読人しらず）〔花〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔集〕

3 よろづの事我身からなりけりと思へばよろづにかなしうこそみたてまつれ（一八〇七7・146）

わが身からうき世の中と歎きつゝ人のためさへ悲しかるらむ（古今集巻六、雑下、九六〇、題しらず　読人しらず）〔異〕

4 たなばたばかりにてもかやうにみたてまつりかよはむは（一八二12・150）

①年毎に逢ふとはすれどたなばたのぬる夜の数ぞ少なかりける（古今集巻四、秋上、一七九、同じ御時きさいの宮の歌合の歌　凡河内躬恒・躬恒集、一五六三、初の秋・古今六帖第一、七日の夜、三〇三六、躬恒・寛平御時后宮歌合、三三四三、躬

恒）〔紫〕〔異〕

②ちぎりけむ心ぞつらきたなばたの年にひと度あふはあふかは（古今集巻四、秋上、一六八、同じ御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風・興風集、一六六〇・古今六帖第一、七日の夜、三〇三、興風・寛平御時后宮歌合、三五四三、藤原興風・同、三五四九）〔紫〕としにひとよは、〔異〕、〔河〕（上句ノミ、真本としに一たびあふはあふかは）、〔休〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔大〕

5 返々みるとも〳〵あくまじくにほひやかにおかしければ（八一三11・152）

春霞たなびく山の桜花みれどもあかぬきみにもあるかな（古今集巻十四、恋四、六四四、題しらず　友則・友則集、一九五三七、古今六帖第五、ふたりをり、三三六〇）〔休〕

6 一もとゆへにこそはとかたじけなけれどあはれになむ（八一三2・154）

紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る（古今集巻十七、雑上、八六七、ある人のいはく此歌はさきのおほいまうち君のなり　読人しらず・古今六帖第五、むらさき、三三四六、「草はなべてもなつかしきかな」）〔紫〕〔異〕、〔河〕（上句ノミ、〔休〕哀れとぞ見し、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

7 うきしまのあはれなりし事もきこえいづ（八一六3・155）

①隔てつる人の心のうき橋を危きまでもふみ見つるかな（後撰集巻一五、雑一、二三三、男の女の文を隠しけるを見てもとのめのかきつけ侍りける　四条御息所の女）〔紫〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕へだてける人の心を浮島の、〔岷〕人の心をうき島の、〔引〕へだてける…うき橋の

②しほがまの前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり（古今六帖第三、しほがま、三六五〇、山ぐちの女わう・新古今集巻十五、恋五、一三七八、題しらず　読人しらず）〔花〕、〔細〕（第二句ノミ、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

8 わが身ひとつのとのみいひあはする人もなき（八一六3・155）

①大方のわが身ひとつの憂きからになべての世をもうらみつるかな（後撰集巻十七、雑三、一三三、題しらず　読人しらず、「あすか川（初句）…淵瀬故」・拾遺集巻十五、恋五、九三三、題しらず　貫之）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞〔一〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

②世の中は昔よりやはうかりけむわが身ひとつのためになれるか（古今集巻六、雑下、九四八、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞〔休〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

9 つくばの山の有さまもかくあきらめきこえさせて（八一六4・155）

筑波山は山しげ山しげゝれど思ひいるにはさはらざりけり（重之集、二〇〇四、百首の歌重之帯刀にてはべりし時春宮に歌召しければ、恋十首）〔紫〕〔河〕〔孟〕

10 あはれなる御心ざまをいは木ならねばおもほしゝるうらみ（八一六4・158）

①思へどもあひもおもはぬ心かななにのいは木のなれるなるらん（未詳）〔異〕

②かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして（万葉集巻四、七三、大伴宿禰家持）〔拾〕

11 かゝる御心をやむるみそぎをせさせたてまつらまほしくおもほすにや（一八八6・158）

恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな（伊勢物語、一三四・古今集巻十一、恋一、五〇一、題しらず）

読人しらず、「神はうけすぞなりにけらしも」〔紫〕〔異〕、〔河〕〔細〕〔湖〕〔新〕（上句ノミ、〔弄〕（初句ノミ、〔一〕（第一二句ノミ、〔休〕〔紹〕、〔孟〕なりにけらしな、〔岷〕神はうけずぞ成にけらしも、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

12 みそぎ川せゞにいださんなで物を身にそふ影とたれかたのまん　ひくてあまたにとかや（一八一九2・159）

大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ（古今集巻十四、恋四、七〇六、ある女の業平朝臣をところ定めずありきすと思ひてよみてつかはしける　読人しらず・伊勢物語、一〇三）〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕（初句ノミ、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

13 つゐによるせはさらなりや（一八一九3・159）

大ぬさと名にこそ立てれ流れても終によるせはありてふものを（古今集巻十四、恋四、七〇七、返し　業平朝臣・伊勢物語、一〇四、「ありといふものを」・業平集、一六四四）〔奥〕〔紫〕〔紹〕ありといふものを、〔異〕〔河〕、〔花〕ながれてはつゐによる瀬も、〔一〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕、〔湖〕ありけるものを、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

14 いとうれたきやうなる水のあわにもあらそひ侍かなかきながさるゝなで物はいでまことぞかし（一八一九3・159）

水の泡のきえてうき身といひながら流れてなほもたのまるるかな（古今集巻十五、恋五、七五一、題しらず　友則・古今六帖第四、うらみ、三九六、伊勢、「消えて浮き世と知りながら流れてもなほ」・同第四、雑の思、三〇三、「思へども」・友則集、一九五六、「知りながら」）〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

15 あまのかはをわたりてもかゝるひこぼしの光をこそまちつけさせめ（一八一九12・160）※わたりても―へだてゝも河別御保池彦星にこひはまさりぬ天の河へだつる関を今はやめてよ（伊勢物語、一八五）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔孟〕（上句ノミ、〔岷〕七夕の（初句）、〔引〕

16 よりゐ給へりつるまきばしらもしとねもなどりにほへるうつりが（一八二〇1・160）

わぎもこが来ては寄りたつ真木柱そもむつまじやゆかりと思へば（未詳）〔釈前〕〔河〕そもむつまじき、〔紫〕〔異〕、〔弄〕（初句ノミ、〔休〕〔紹〕きてはよりゐし、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔対〕〔事〕〔大〕

17 鳥のねきこえざらんすまゐまで思給へをきつれ（一八二〇12・161）

とぶ鳥の声もきこえぬおく山の深き心を人は知らなむ（古

今集巻十一、恋一、三三、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕（上句ノミ、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

18 数ならぬ身に物おもふたねをやいとゞまかせてみ侍らん（一八三2・162）

①かずならぬ身には思ひのなかれかし人なみ〳〵にぬるゝ袖かな（未詳）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕

②今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずもがな（伊勢物語、吾四・新勅撰集巻十四、恋四、八八一、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔集〕

③種無くてなき物草はおひにけりまくてふ事は有らじとぞ思ふ（拾遺集巻九、雑下、三三、草合し侍りける所に　恵慶法師）〔拾〕〔新〕〔余〕〔大〕

19 いはほの中にともいかにとも思給へめぐらし（一八三9・162）

いかならむ巌の中に住まばかは世の憂き事のきこえこざらむ（古今集巻六、雑下、九三、題しらず　読人しらず・古今六帖第二、いはほ、三八六、「住まへばか…尋ね来ざらむ」）〔紫〕〔異〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕（上句ノミ）、〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

20 なき名はたてゞとうちそむき給ふもらうたげにおかし（一八三12・164）

思はむと頼めしこともある物をなき名は立てゞただに忘れね（後撰集巻十、恋二、六三、をとこの許より今はこと人あんなればといへりければ女にかはりて　読人しらず・元輔集、一九三八、とて遣はしたりければ、「なき名は立てでただに忘れぬ」・清慎公集、三三、かへし、女に代りて、「なき名は立てでただに忘れよ」）〔釈前〕おもはむのためしことばゝ…なき名はたてゞたれか忘れん、〔釈書〕なき名はたてゞたゞに忘れそ、〔奥〕〔湖〕なき名はたてゞ、〔紫〕、〔異〕なき名はたてゞたゞに忘れよ、〔河〕〈弄〉〔一〕〔紹〕、〔休〕〔紹〕たゞに忘るな、〔孟〕〔屋〕、〔岷〕なきなはたてゞ…たゞに忘れぬ、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

21 明るもしらずおほとのごもりたるに（一八三13・164）

玉すだれ明くるもしらで寝しものを夢にも見じと思ひけるかな（伊勢集、一八二六、長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其の所々をよませ給ひけり御手にて）〔紫〕〔異〕〔岷〕

あくるもしらず…思ひかけきや、〔花〕明くるもしらず、〔休〕思ひかけきや、〔孟〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

22 おそろしき夢のさめたる心ちしてあせにおしひたしてふし給へり（一八三14・170）

さまざまにおもふこころはあるものをおしひたすらにぬる袖かな（後拾遺集巻十四、恋四、八七、題しらず　和泉式部）〔拾〕

23 いはでうしと思はんことといとはづかしげに心ふかきを（一八三17・173）

①心には下行く水の湧き返りいはで思ふぞいふにまされる（古今六帖第五、いはで思ふ、三四四）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔孟〕

いふにまされぬ、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔大〕〔集〕

②思ふ事言はでぞ唯にやみぬべき我と等しき人しなければ
〔伊勢物語、三三・新勅撰集巻十七、雑三、一三六〕〔紫〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

24 ことしもありがほにおぼすらむをたゞおほどかにてみえたてまつり給へ（一八三12・173）
夏葛の絶えぬ使のよどめれば事しもあるごと思ひつるかも
〔万葉集巻四、六四六、大伴坂上郎女〕〔拾〕かよはざれ（第三句）

25 あひてもあはぬやうなる心ばえにこそ（一八三12・176）
①ふすほどもなくて明けぬる夏の夜はあひてもあはぬ心地こそすれ（未詳）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞〔一〕、〔細〕夢のよは、〔休〕心こそすれ、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕
②年の内にあひてもあはぬ歎きせし人のうへこそ我が身なりけれ（未詳）〔異〕
③いさやまたかかる思ひを知らぬかな逢ひても逢はで明くる物とは（和泉式部日記、四四〇）〔集〕

26 ことだにおしきと宮のうちずし給へりしを（一八三12・180）
移ろはむことだに惜しき秋はぎに折れぬばかりもおける露かな（拾遺集巻三、秋、一八三、亭子院の御屏風に　伊勢・古今六帖第六、秋萩、三四三〇、伊勢・伊勢集、一八一〇〇、まひ女・和漢朗詠集巻上、秋、萩、二六四、伊勢）〔釈前〕〔紫〕秋はぎををれるばかりも、〔奥〕〔孟〕秋萩を、〔異〕秋萩をおれるばかりに、〔河〕＜弄＞〔一〕〔細〕〔休〕、〔紹〕おれるばかりに、〔屋〕、〔岷〕〔湖〕おれるばかりも、〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

27 宮ぎ野のことはぎがもとゝしらませば露も心をわかずぞあらましし（一八三5・181）
宮城野のもとあらのこ萩露を重み風を待つごと君をこそ待て（古今集巻十四、恋四、六四四、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、人をまつ、三六六四・同第六、秋萩、三四九六）〔河〕〔孟〕〔岷〕、〔湖〕（上句ノミ）、〔事〕

28 ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所と思はましかばとおさなげにいひたるを…浮世にはあらぬ所をもとめても君がさかりをみるよしもがな（一八四4・183）
①世の中にあらぬ所もえてしがな年ふりにたるかたちかくさむ（拾遺集巻八、雑上、五〇六、題しらず　読人しらず）〔河〕、〔花〕あらぬ所を…とし過ぎにたる、〔休〕〔紹〕、〔孟〕〔湖〕あらぬ所を、〔岷〕〔河〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
②恋わびてへじとぞ思ふ世の中にあらぬ所やいづこなるらん（曽丹集、三五五）〔花〕〔岷〕いづくなるらん、〔孟〕あらぬ所はいづくなるらん、〔大〕

29 人わたすことだになきを何しかも長柄の橋と身のなりぬらむ（後撰集巻十五、雑一、一二八、法皇御ぐしおろし給ひての頃　七条后・古今六帖第三、橋、三四五〇、「何にかも」、伊勢集、一八四六、七条のきさきの宮入道し給ひての頃）〔紫〕、

〔異〕などてかく…身のふりぬらん、〔花〕〔一〕〔岷〕〔新〕身のふりぬらん、〔休〕〔孟〕〔湖〕身のふりにけん、〔紹〕身はふりにけん、〔屋〕〔評〕〔集〕

30 夜行うちしてやかたのたつみのすみのくづれいとあやしうこの人のみくるまいるべくは（一八四5・189）

①沖つ鳥鴨といふ船の還り来ば也良の埼守早く告げこそ（万葉集巻十六、三八六六）〔河〕〔岷〕かへりにはやがのさきもり、〔孟〕おきつよりかもといふ舟

②わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり（古今集巻十八、雑下、九五三、題しらず　喜撰法師・古今六帖第二、山、三七六一、きせん法師、「わが宿は…人はいふらむ」）〔岷〕（第三句ノミ）

31 さのゝわたりにいゑもあらなくになどくちずさびて（一八四9・190）

苦しくも降りくる雨か三輪が崎さのゝわたりに家もあらなくに（万葉集巻三、三六五、長忌寸奥麿）〔奥〕、〔紫〕みわのさき、〔異〕〔河〕〈弄〉、〔一〕ふりくる雨を、〔細〕〔湖〕わりなくも（初句）、〔休〕〔紹〕〔屋〕にはかにも（初句）、〔孟〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

32 さしとむるむぐらやしげきあづまやのあまりほどふる雨そゝぎかな（一八四11・190）

①東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそぎ　我立ち濡れぬ　殿戸開かせ　かすがひも　縁もあらばこそ　その殿戸　我　鎖め　おし開いて来ませ　我や人妻（催馬楽、東屋、六）〔奥〕あはれわがつま、〈河〉〈細〉〈休〉〈孟〉〈岷〉〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②東屋のまやのあまりの雨そゝきあまりなるまでぬるゝ袖かな（未詳）〔休〕〔紹〕

33 ひだのたくみもうらめしきへだてかな（一八四1・190）

とにかくにものは思はずひだたくみ打つ墨縄のたゞ一筋に（拾遺集巻十五、恋五、九四〇、題しらず　人麿・柿本集、一五〇八・古今六帖第五、たのむる、三八〇四、人麿、「いひしいはゞ物は思はじ…ただ一道に」）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

34 ほどもなうあけぬる心ちするに鳥などはなかでおほぢゝかきところに（一八四6・190）

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば（古今集巻十三、恋三、六三六、題しらず　凡河内躬恒・小町集、一九五八・古今六帖第五、ふせり、三五七〇）〔対〕〔集〕

35 かゝるよもぎのまろねにならひ給はぬ心ちも（一八四9・191）

※よもぎのまろねに―きのまろどのに別御保

朝倉や　木の丸殿に　我が居れば　名宣りをしつつ　行くは誰（神楽歌、朝倉、七九）〔異〕

36 行方なきかなしさはむなしき空にもみちぬべかめり（一八四4・194）

我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし（古今集巻十一、恋一、四八七、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、恋、三八一六）〔釈前〕〔奥〕、〔紫〕〔河〕〔紹〕〔屋〕

〔岷〕〔湖〕〔新〕行く方のなき、〔異〕〔一〕〔細〕〔休〕〔孟〕みちぬなり…ゆく方ぞなき、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

37 あはれ我つまといふことはさりともてならし給けん（一八三13・196）

①東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそき　我立ち濡れぬ　殿戸開かせ　かすがひも　綻もあらばこそ　その殿戸　我　鎖め　おし開いて来ませ　我や人妻（催馬楽、東屋、六）

〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕＜全＞〔大〕〔評〕＜集＞

②あはれ我が妻とも君を思ひてやあかずてのみやかへりみがちに（未詳）〔異〕

38 ことこそあれあやしくもいひつるかなとおぼす（一八三6・197）

山里は物の寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり（古今集巻六、雑下、九四四、題しらず　読人しらず・忠岑集、一九六七九・小町集、一九六七九・和漢朗詠集巻下、山家、三六三）〔紫〕物のわびしき、〔異〕〔河〕〔孟〕＜岷＞

浮　舟

1 ものいひさがなくきこえいでたらんにも（一八三7・201）

こゝにしも何匂ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に（拾遺集巻十七、雑秋、一〇九六、房の前栽見に女どもまうで来りければ　僧正遍昭・遍昭集、一八八七）〔河〕〔孟〕〔屋〕、〔岷〕（私不及引歌）

2 かやすくかよひたまふべきみちならねば神のいさむるよりもわりなし（一八三5・202）

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに（伊勢物語、一四六・和泉式部日記、三六一・続千載集巻十三、恋三、一四〇一）〔釈前〕なかならなくに、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

3 山ざとのいぶせさこそみねのかすみもたえまなくて（一八三4・205）

①山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ（古今集巻六、羇旅、四一三、あづまの方より京へまうでくとて道にてよめる　おと・古今六帖第二、都、三〇九六、「霞ぞ春は」）〔新〕〔大〕

②都人いかにと問はゞ山高みはれぬ雲居にわぶとこたへよ（古今集巻六、雑下、九三七、甲斐守に侍りける時京へまかりのぼりける人につかはしける　小野貞樹・古今六帖第二、

都、三〇九九）〔新〕〔大〕

4 まづあげよとのたまふこゑいとようまねびにせ給てしのびたれば（一八七二11・216）

あやしくもわれ濡れ衣きたるかな三笠の山を人にかられて（拾遺集巻十八、雑賀、一二九一、おなじ少将かよひ侍りける所に兵部卿致平のみこまかりて少将のきみおはしたりといはせ侍りけるを後に聞きてかのみこのもとに遣はしける　藤原義孝・清慎公集、三三九九、右衛門の命婦のもとにこの少将に名のりみやのおはしたりと聞きて云ひやる、「我濡衣を」・藤原義孝集、三四四七、左衛門督の命婦の許に権中将となのりて宮のおはしたりと聞きてやる、「我濡衣を」）

〔一〕〔湖〕我ぬれぎぬを

5 なにごともいけるかぎりのためにこそあれたゞいまいでをはしまさんをまことにしぬべくおぼさるれば（一八四5・218）

恋死なむ後は何せむ生ける日のためこそ人は見まくほしけれ（拾遺集巻十一、恋一、六六六、題しらず　大伴百世・古今六帖第四、恋、三八三四・万葉集巻四、五六〇・同巻十一、二五九二）

〔釈前〕〔異〕〔紹〕いける身の、〔奥〕（上句ノミ）、〔紫〕〔河〕、〔一〕いける世の、〔細〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

6 まことにしぬべくおぼさるればこの右近をめしよせて（一八四5・218）

恋しとはたが名づけけむ事ならむ死ぬとぞ唯に云ふべかりける（古今集巻十四、恋四、六九八、題しらず　深養父・古今六帖第四、恋、三八五八、「誰が名づけゝむことの葉ぞ」）〔新〕〔大〕〔集〕

7 こよひゆめみさはがしくみえさせ給へればけふばかりつゝしませたまへ（一八七1・222）

①ねぬるよのかべ騒がしく見えしかど我ちがふれば事なかりけり（金葉集巻九、雑上、六〇九、男のなかりける夜こと人をつぼねにいれたりけるにもとの男まうできあひたりければさわぎてかたはらのつぼねの壁のくづれよりくゞりてにがしやりて又の日その逃したる局のぬしのがり、よべかべこそうれしかりしかなどいひに遣はしたりければよめる　読人しらず）〔拾〕

②ねぬる夜の夢さわがしくみえつるはあふに命をかへやしつらん（和泉式部集、四〇八四、男のほかにある夜人に物いふさまにみゆれば）〔拾〕

8 まぎるゝことなくのどけきはるのひにみれども〳〵あかず（一八七7・223）

①久かたの光のどけき春の日に静心なく花のちるらむ（古今集巻二、春下、八四、さくらの花のちるをよめる　紀友則・友則集、一九五〇二・古今六帖第六、花、三四八七、友則・同第六、さくら、三五〇三九）〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕

②春がすみたなびく山の桜花見れどもあかぬ君にもあるかな（古今集巻十四、恋四、六八四、題しらず　友則・古今六帖第五、ふたりをり、三三六〇、貫之・友則集、一九五二七）〔湖〕きみにぞありける、〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕

9 心に身をもさらにえまかせずよろづにたばからんほど（一八七4・224）
①いなせとも云ひ放たれず憂きものは身を心ともせぬよなりけり（後撰集巻十三、恋三、九三八、親の護りける女をいなともせともいひ放てと申しければ　伊勢・伊勢集、一八三〇）〔拾〕
②数ならぬ心に身をば任せねど身にしたがふは心なりけり（紫式部集、三八三六、身を思はずなると歎くことのやう〳〵なのめにひたぶるのさまなるを思ひける・千載集巻十七、雑中、一〇九三、題しらず　紫式部、「かずならで」）〔拾〕数ならで

10 いでたまひなんとするにもそでのなかにぞとゞめ給らんかし（一八八3・226）
あかざりし袖のなかにや入りにけむ我が魂のなき心地する（古今集巻十八、雑下、九四三、女ともだちと物語して別れて後につかはしける　みちのく）〔釈前〕いかにとも（第三句）、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔圭〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

11 よにしらずまどふべきかなさきにたつなみだもみちをかきくらしつゝ（一八八5・226）
別るればまづ涙こそさきにたていかで後るゝ袖のぬるらむ（拾遺集巻六、別、三四、題しらず　読人しらず）〔拾〕〔新〕

12 なみだをもほどなきそでにせきかねていかにわかれをとゞむべき身ぞ（一八八7・226）
①何かこのほどなき袖をぬらすらむ霞の衣なべてきる世に（紫式部集、三八一三、かへし・新千載集巻十九、哀傷、二一九、東三条院かくれさせ給ひて又の年の春せをそこしたる人の返事に　紫式部）〔拾〕
②惜しむともかたしや別れ心なる涙をだにもえやはとゞむる（拾遺集巻六、別、三三、同じ御乳母のせんに殿上のをのこども女房など別をしみ侍りけるに　御乳母少納言）〔拾〕〔新〕

13 霜ふかきあか月にをのがきぬ〴〵もひやゝかになりたる心ちして（一八八8・226）
しのゝめのほがら〳〵と明けゆけばおのが衣〳〵なるぞ悲しき（古今集巻十三、恋三、六三七、題しらず　読人しらず）〔釈前〕〔異〕あけぬれば、〔奥〕〔紫〕、〔河〕〔圭〕〔屋〕〔湖〕なるぞわびしき、〔休〕〔紹〕〔眠〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 御とのの人〴〵いとたはぶれにくしとおもひて（一八八9・226）
ありぬやと心見がてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇一三、題しらず　読人しらず）〔評〕〔集〕

15 ありやなしやをきかぬまはみえたてまつらんもはづかし（一八八10・228）
心ありてとふにはあらず世の中にありやなしやのきかまほしきぞ（拾遺集巻十八、雑賀、二九三、年月をへてけさうじ侍りける人のつれなくのみ侍りければ今はさらによにもあら

じといひて後久しく音づれず侍りければかの男の妹うとにさきゞ〳〵も語らひて文など遣はしければいひ遣はしける読人しらず〔異〕、〔引〕きかまほしさぞ

16 いみじくいふにはまさりていとあはれと人のおもひぬべきさまを（一八八5・231）

心には下行く水のわきかへりいはで思ふぞいふに優れる（古今六帖第五、いはで思ふ、三四九四）〔釈前〕したにのみ（第三句）、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔集〕

17 たえまのみよにはあやうきうぢはしをくちせぬものとなをたのめとや（一八八9・233）

忘らるゝ身をうぢ橋の中たえて人も通はぬ年ぞへにける（古今集巻十五、恋五、八三五、題しらず　読人しらず）〔集〕

18 ひとのものいひやすからぬにいまさらなり（一八八10・233）

こゝにしも何匂ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に（拾遺集巻十七、雑秋、一〇九八、房の前栽見に女どもまうで来りければ　僧正遍昭・遍昭集、一八八七）〔対〕

19 心くるしうおぼしいづることありしにまさりけり（一八八12・233）

いとひてはイ出でゝいなば誰か別れの難からむありしにまさる今日は悲しも（伊勢物語、九三・業平集、一六一五五、「厭ひては何か別れの惜しからむ」・古今六帖第四、別、三三〇四、「厭ひては」・続後撰集巻十三、恋三、八三六）〔紫〕いとひては、〔河〕〔休〕〔孟〕、〔屋〕けふはかなしき

20 御こゑはいとめでたくてむめがへなどうたひたまふ（一八九1・234）

①梅が枝にきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ（古今集巻一、春上、五、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、三三四四）〔紫〕〔異〕、〔引〕（第二句ノミ）、〔評〕

②梅が枝に　来居る鶯　や　春かけて　はれ　春かけて　鳴けどもいまだ　や　雪は降りつつ　あはれ　そこよしや　雪は降りつつ（催馬楽、梅枝、三八）〔異〕〔全〕〔対〕〔評〕

〈集〉

21 ほしのひかりおぼ〳〵しきをやみはあやなしとおぼゆる（一八九6・234）

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる（古今集巻一、春上、四一、春の夜梅の花をよめる　躬恒・古今六帖第六、梅、三四九七、躬恒・和漢朗詠集巻上、春、春夜、二六、躬恒）〔紫〕、〔異〕（初句ノミ）、〔河〕〔一〕〔湖〕（上句ノミ）、〔休〕〔新〕（第二句ノミ）、〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

22 ころもかたしきこよひもやとうちずむじたまへるも（一八九7・234）

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治のはし姫（古今集巻十四、恋四、六八九、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、家とうじを思ふ、三三八六）〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕（第二句ノミ）、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕（第一二三四句ノミ）、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

23 京にはともまつばかりきえのこりたるゆきやまふかくいるゝまに（一八九7・235）
白雪の色わきがたき梅が枝に友まつ雪ぞ消え残りたる（家持集、一XIOX）〔集〕

24 これなんたちばなのこじまと申して御ふねしばしさしとゞめたるを（一八九2・237）
今もかもさき匂ふらむたち花のこじまのさきの山吹の花
（古今集巻三、春下、一三、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、山吹、三四四三）〔河〕〔孟〕、〔岷〕こじまがさきの、〔評〕〔集〕

25 されたるときは木のかげしげれり（一八九3・237）
橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹
（万葉集巻六、一〇〇九、御製）〔岷〕枝に霜おけましてときは木、〔湖〕（第二句ノミ）

26 たちばなのこじまのいろはかはらじをこのうきふねぞゆくゑしられぬ（一八九8・237）
さつきまつはな橘の香をかげば昔のひとの袖の香ぞする
（古今集巻三、夏、一三九、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、たちばな、三三〇六・伊勢物語、一四・和漢朗詠集巻上、夏、花橘、一七三）〔集〕

27 わがなもらすなよとくちがため給（一八九10・238）
いぬかみのとこの山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな（古今集墨滅歌、巻十三、二〇八・古今六帖第五、名を惜む、三九七、あめのみかど・万葉集巻十一、二七一〇）〔釈前〕いぬかみや…いさとこたへて、〔奥〕いぬかみや…いさらかはいさとこたへて、〔紫〕〔異〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕いさとこたへて、〔河〕いさら川、〔孟〕いさら河いさとこたへて、〔引〕、〔新〕いさときこえず我なのらすな、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

28 かのわがすむかたをみやりたまへれば（一八九8・239）
晴るゝ夜の星か河辺の螢かも我がすむ方のあまのたく火かな
（伊勢物語、一二五・新古今集巻七、雑中、一五六、題しらず　在原業平朝臣）〔河〕〔孟〕〔引〕

29 やまはかゞみをかけたるやうにきら〳〵とゆふひにかゞやきたるに（一八九9・239）
近江のや鏡の山をたてたればかねてぞみゆる君が千年は
（古今集巻三十、大歌所御歌、一〇八六　大伴黒主）〔河〕近江なる（真本のみ）、〔孟〕

30 ことはたのさとにむまはあれど（一八九11・239）
山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ来る君を思へば
（拾遺集巻十九、雑恋、一二四三、題しらず　人麿・古今六帖第二、国、三二一五、人麿、「山城の木幡の森に…思ふがためは歩みてぞ来る」・万葉集巻十一、二四三五）〔釈前〕やましろの…思ふ方へはかちより、ぞゆく、〔奥〕（上句ノミ、「山しろの」）、〔紫〕〔異〕〔休〕〔紹〕〔岷〕山しろの…君を思へばかちよりぞゆく、〔河〕山城のこわたの山に（木本里傍書山）…君を思ひかね、〔花〕（第五句ノミ）、〔一〕〔湖〕〔引〕山城の…君を思ひかね、〔孟〕山城のこわたの山に…かちにてぞくる君を思

ひかね、〔新〕山城の…かちよりわがく君を思ひかね、
〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

31 ふりみだれみぎはにこほるゆきよりもなかぞらにてぞわれは
けぬべき（一八四13・239）
なかぞらに行きもやられずおぼつかなかすみはれせぬしか
の山声（未詳）〔岷〕

32 うらみてもなきてもよろづのたまひあかして夜ふかくゐでか
へりたまふ（一八五13・240）
恨みてもなきてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして
（古今集巻十五、恋五、八一四、題しらず　藤原興風・興風集、
一六六九）〔釈前〕たとへていはんことのはかなさ、〔奥〕
〔紫〕、〔異〕たとへてとはんことのはもがな、〔河〕、〔休〕
（第一二三四句ノミ）、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

33 おやのかうこはところせきものにこそとおぼすも（一八五1・
242）
①たらちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹に
逢はずて（拾遺集巻十四、恋四、八五五、題しらず　人麿・古今
六帖第二、親、三三七一、いへのおとくろまろ・同第五、わぎ
もこ、三九三三・柿本集、一五三五、「君に逢はずて」・万葉集巻
十二、三九二）〔釈前〕〔紫〕〔異〕、〔河〕（上句ノミ）、〈一〉〔細〕
（第五句ノミ、「いもにあはずして」）、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕
〔岷〕〔湖〕〔引〕〈拾〉〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
②垂乳根の親の諫めしうたたねは物思ふ時のわざにぞありけ
る（拾遺集巻十四、恋四、八五七、題しらず　読人しらず・古今
六帖第四、うたゝね、三九二七、小町、「わざにざりける」）
〔奥〕〔異〕（上句ノミ）

34 あやしかりしゆふぐれのしるべばかりにだに（一八五12・242）
いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけ
り（古今集巻十一、恋一、五四六、題しらず　読人しらず・小町
集、一九六六、「あやしかりけり秋の夕暮」）〔河〕、〔休〕悲し
からずは、〔孟〕〔屋〕〔引〕

35 つねよりも思やりきこゆる事まさりてなんとしろきしきしに
たてぶみなり（一八六12・244）
まこもかる淀の沢水雨ふればつねよりことにまさるわが恋
（古今集巻十二、恋二、五七七、題しらず　貫之・貫之集、一七七四
・古今六帖第三、沢、三三八六、貫之）〔新〕〔大〕

36 さとのなを我身にしればやましろのうぢのわたりぞいとゞす
みうき（一八九3・244）
わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
（古今集巻十八、雑下、九八三、題しらず　喜撰法師・古今六帖
第二、山、三九六一、きせん法師、「わが宿は…人はいふらむ」）
〈細〉〈孟〉〈岷〉〈湖〉〔集〕

37 まじりなばときこえたるを（一八九6・244）
①行く舟の跡なき波にまじりなばたれかは水の泡とだに見む
（新勅撰集巻十四、恋四、四四一、題しらず　読人しらず）〔釈
前〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔新〕あとなき方に、
〔奥〕〔紫〕〔一〕〈細〉〔湖〕〔引〕〔全〕〔事〕〔集〕

②白雲のはれぬくもゐにまじりなばいづれかそれと君はたづねむ（未詳）　〔異〕〔花〕、〔弄〕（初句ノミ、〔一〕＜細＞〔休〕、〔紹〕君を尋ねん、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

③ほとゝぎす峯の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなし（古今集巻十、物名、四四七、やまし　平あつゆき）
〔玉〕〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

38 つれづれと身をしるあめのおやまねば袖さへいとゞみかさまさりて（一八九10・245）

①かずかずに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる（古今集巻十四、恋四、七三五、藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける女をあひ知りて文遣はせりける言葉に今まうでく雨の降りけるをなむみ煩ひ侍るといへりけるを聞きてかの女にかはりてよめりける　在原業平朝臣・伊勢物語、二一〇・古今六帖第一、雨、三三三、業平・業平集、一六三二）
〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕＜玉＞〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふ由もなし（古今集巻十三、恋三、六一七、業平朝臣の家に侍りける女のもとによみて遣はしける　敏行朝臣・伊勢物語、一六・古今六帖第一、雨、三三六、敏行、「袖のみひちて逢ふよしもなみ」・同第四、涙川、三九三〇、敏行、「袖のみひちて」・敏行集、一六四四、業平の朝臣の家の女に遣はしゝ、「袖のみひちて」）〔湖〕（上句ノミ、〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

39 さそふみづあらばとはおもはずいとあやしう（一九〇14・246）

わびぬれば身は浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ（古今集巻十六、雑下、九三六、文屋康秀が三河のぞうになりてあがた見には得出でたゝじやと云ひやれりける返事によめる　小野小町・古今六帖第六、浮草、三四六〇、小野小町・小町集、一九六〇六、康秀が三河になりてあがた見はいでたゝじやといへる返ごとに）〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕、〔湖〕（上句ノミ、〔引〕、〔新〕（第二句ノミ）、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

40 やへたつ山にこもるもかならずたづねて（一九〇12・247）

①白雲の絶えずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそ有けれ（古今集巻十六、雑下、九四五、題しらず　惟喬のみこ・小町集、一九六七、「物にぞありける」・古今六帖第二、峯、三八五、〔釈前〕〔全〕やえたつ山の（第二句）…すめばすまるゝ、〔奥〕、〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕やへたつ山の、〔評〕

②しら雲の八重たつ山にこもるとも思ひ立ちなばたづねざらめや（未詳）　〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

③八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を（古事記巻上、一）〔集〕

41 さいつごろわたしもりがむまごのわらはさほさしはづしておちいり侍りける（一九〇四7・250）

ちはや人うぢのわたりにさほどりにはやけむ人しわがもこにせむ（日本書紀巻十一、一四九、太山守皇子）〔花〕〔休〕、

〔紹〕棹とるに…わびもこにせん、〔孟〕〔湖〕わびもこにせん、〔新〕ちはやぶる、〔集〕

42 みたらしがはにみそぎせまほしげなるを（一九三1・251）

恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな（伊勢物語、一三四・古今集巻十一、恋一、五〇一、題しらず読人しらず、「神はうけずぞなりにけらしも」）〔釈前〕、〔奥〕（第一二三四句ノミ）、〔紫〕〔異〕、〔河〕〔新〕（上句ノミ）、〔休〕〔紹〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

43 たけふのこうにうつろひ給ともしのびてはまいりきなんを（一九三10・252）

道の口　武生のこふに　我はありと　親に申したべ　心あひの風や　さきむだちや（催馬楽、道の口、二〇）〔釈前〕

見知久知太介不乃上不尒和礼波安＝一利と於己尒万宇之太也呂安ゝ比乃加世也太夫无太安知也、〔釈書〕（ママ）みちのくにたけふのこうにわれはありとおやに申たえ心あひの風や、〔奥〕見知のく知た介不の己不尒われは安利とおやに万宇之た戸己己呂安比の加せや己支无太知也、〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞＜一＞＜細＞〔休〕〔紹〕＜孟＞＜屋＞＜岷＞〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

44 いかにおぼしたゞよふぞかぜのなびかんかたもうしろめたくなん（一九三14・252）

①浦風になびきにけりな里のあま、のたくもの煙心よわさは（後拾遺集巻十二、恋三、七〇六、かたらひ侍りける女のこと人にものいふときゝてつかはしける　藤原実方朝臣・実方朝臣集、三三三）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔屋〕こゝろよはさに、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔対〕〔大〕

②須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり（古今集巻十四、恋四、七〇八、題しらず　読人しらず・伊勢物語、三〇八・古今六帖第一、煙、三六六六、「伊勢のあまの」・同第三、しほ、三六三七、「伊勢のあまの」）〔弄〕（第二句ノミ）、〔休〕〔紹〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

45 なみこゆるころともしらずゝゑのまつまつらんとのみ思ひけるかな（一九三13・258）

①こえにける波をばしらで末の松ちよまでとのみ頼みけるかな（後拾遺集巻十二、恋二、七〇五、忍びて通ふ女のまたこと人にものいふときゝてつかはしける　藤原能通朝臣）〔異〕

越しにける

②君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ（古今集巻三十、東歌、一〇九三）〔花〕＜弄＞〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

46 こけのみだるゝわりなさをのたまふ（一九三16・265）

①逢ふことをいつかその日と松の木の苔のみだれて恋ふる此のころ（古今六帖第六、こけ、三四八〇五）〔異〕逢ふことはいつか〳〵と松の葉の…物をこそおもへ、〔新〕〔事〕〔集〕

②君に逢はむその日をいつと松の木の苔のみだれてものをこそ思へ（新勅撰集巻十三、恋三、七三四、題しらず　読人しらず）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕その日はいつぞ、〔異〕その日はいつもぞ、＜弄＞、〔一〕〔屋〕その日は

いつと、〔細〕君があはん其日はいつと松のはの、〔引〕その日はいつも、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

47 むかしはけさうする人のありさまのいづれともなきに思わづらひてだにこそ身をなぐるためしもありけれ（一九一九1・265）

①住み侘びぬ我が身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり（大和物語、六七）〔紫〕すみわびて…名にこそありけれ、〔異〕〔紹〕〔眠〕名にこそありけれ、〔河〕生田のうみは名にこそ有けれ、＜細＞、〔休〕住みわびて我が身投げゝん…名にこそ有けれ、〔湖〕〔引〕

②春さらば挿頭にせむとわが念ひし桜の花は散りいにしかも（万葉集巻十六、三七八六）〔紫〕はるされば…さくらこのさくらの花はちりにけるかも、〔異〕春されば…散りにけるかし、〔花〕春されば…ちりにける哉、＜弄＞＜一＞＜細＞＜紹＞〔孟〕〔眠〕〔湖〕ちりにけるかも、＜新＞＜大＞＜集＞

③妹が名にかけたる桜花咲かば常にや恋ひむいや毎年に（万葉集巻十六、三七八七）〔紫〕〔異〕〔花〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕

④古の小竹田の壮士の妻問ひし菟原処女の奥津城ぞこれ（万葉集巻九、一八〇三）〔河〕〔眠〕＜大＞

48 むつかしきほぐなどやりておどろ〳〵しくひとたびにもしたゝめずとうだいの火にやき水になげいれさせなど（一九一七8・265）

やればをしやらねば人に見えぬべし泣々も猶返す勝れり（後撰集巻十六、雑二、二四四、たまさかに通へりける文をこひかへしければその文にぐして遣はしける　もとよしの親王・古今六帖第五、ふみ、三四三三・元良親王集、三二九、さま〴〵通はし給ひける御文ども今日かへし奉り給ふとて　御息所）〔紫〕〔異〕

49 ゆくかたしらずむなしきそらにみちぬる心ちし給へば（一九一九10・268）

①わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし（古今集巻十一、恋一、四八七、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、恋、三八三六）〔釈前〕、〔奥〕（上句ノミ）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔休〕〔屋〕ゆくかたのなき、〔紹〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕

②わが恋は行くえもしらずはてもなしあふを限りと思ふばかりぞ（古今集巻十三、恋三、七二一、題しらず　躬恒・古今六帖第四、恋、三八三五・和漢朗詠集巻下、恋、七七七、躬恒）〔眠〕

50 いづくにか身をばすてんとしら雲のかゝらぬ山もなく〳〵ぞゆく（一九一三6・271）

①いづくとも所定めぬ白雲のかゝらぬ山はあらじとぞ思ふ（拾遺集巻十九、雑恋、一三七、題しらず　読人しらず）〔異〕、〔一〕〔拾〕いづことも、〔眠〕（第三四句ノミ）、〔湖〕〔事〕

②いづくにか世をば厭はむ心とぞ野にも山にも惑ふべらなれ（古今集巻十六、雑下、九四七、題しらず　素性・素性法師集、一五七八、「世をばつくさむ」）〔一〕

③白雲のかゝるそらどとする人を山のふもとによせてけるかな（拾遺集巻十九、雑恋、一三八、題しらず　読人しらず）

〔拾〕

51 まくらのやう〳〵うきぬるをかつはいかにみるらんと（一九三10・271）

ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり

（古今六帖第五、まくら、三四八七）〔評〕

52 あけたてばかはのかたをみやりつゝ（一九三10・272）

明けたてば蟬のをりはへ鳴き暮らし夜は蛍のもえこそ渡れ

（古今集巻十一、恋一、五三、題しらず　読人しらず）〔河〕

〔孟〕、〔岷〕もえこそまされ（私不及引歌）

53 ひつじのあゆみよりもほどなき心地す（一九三10・272）

①けふもまた午の貝こそ吹きつなれ羊の歩み近づきぬらむ

（千載集巻十六、雑下、誹諧、二九七、山寺に罷でたりける時貝吹きけるを聞きてよめる　赤染衛門）〔釈前〕ふきぬなれ…近づきにけり、〔奥〕午のかひをぞふきつなる、〔紫〕、〔異〕みちつきぬらん…近づきにけり、〔花〕、〔休〕しばしとゞまれ…近づきにけり、〔孟〕、〔岷〕近づきにけり、〔湖〕〔引〕〔事〕

②あはれけふ冬のはじめになりにけり羊の歩みことならぬかな（未詳）〔異〕

54 からをだにうきよの中にとゞめずはいづこをはかと君もうらみん（一九三13・272）

①今日過ぎばしなましものを夢にてもいづこをはかと君がとはまし（後撰集巻十、恋二、六四一、まかり出て御文遣したりければ　中将更衣）〔紫〕〔異〕けふすぎて…君はとはまし、〔河〕〔休〕けふ過ぎて…いづくをはかと、〔紹〕〔孟〕、〔岷〕けふ過ぎて…いづくをはかと君も問はまし、〔湖〕いづくをはかと君はとはまし、〔新〕君はとはまし、〔大〕〔評〕

②空を飛ぶ天の羽衣えてしがな浮き世の中にうちもとゞめじ（未詳）〔異〕

③うつ蟬はからを見つつもなぐさめつふか草の山煙だにたて

（古今集巻十六、哀傷、八三、堀川のおほきおほいまうち君身まかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける　僧都勝延・遍昭集、一八七七、深草の山に納め奉りしを思ひ参らせむ心のほどは思ひやるべし、「げぶりだにたて深草の山」）〔河〕（上句ノミ、〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔岷〕（私不及引歌歟）、〔評〕

55 ねぬる夜の夢にいとさはがしくてみえ給ればいやはかなにもなりまさるかな（一九三4・272）

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな（古今集巻十三、恋三、六四四、人に逢ひてあしたによみて遣はしける　業平朝臣・業平集、一六一四三・古今六帖第四、片恋、三八八二、業平）〔集〕

56 めのとあやしくこゝろはしりのするかなゆめもさはがしと（一九三4・274）

人にあはむ月のなきには思ひ置きてむね走り火に心やけをり（古今集巻十九、誹諧、一〇三〇、題しらず　小野小町・小町集、一九五九二、「月のなき夜は」）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕（下句ノミ、〔休〕〔孟〕心やけけり、〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔大〕

57 ものおもふ人のたましゐはあくがるなるものなればゆめもさ

はがしきならん（一九三10・274）

①思ひあまり出でにしたまのあるならむ夜深く見えばたま結びせよ（伊勢物語、二〇四）〔湖〕〔引〕〔事〕

②物思へば沢の蛍も我が身よりあくがれ出づる玉かとぞみる（後拾遺集巻三十、神祇雑六、二〇六四、男に忘られて侍りける頃貴ぶねにまゐりてみたらし川に蛍のとび侍りけるを見て詠める　和泉式部）〔大〕

蜻蛉

1 かの心しれるどちなんいみじく物をおもひ給へりしさまを思ひ出るに身をなげたまへるかとはおもひよりける（一九三6・277）

世の中のうきたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ（古今集巻十六、雑体、誹諧、一〇六一、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

2 いとおぼつかなさにまどろまれ侍らぬげにやこよひは夢にだにうちとけてもみえず（一九三7・277）

①思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを（古今集巻十二、恋二、五三三、題しらず　小野小町・小町集、一九六四、ゆめに人のみえしかば・古今六帖第四、片恋、三八一、小町）〔異〕

②恋しきを何につけてか慰めむ夢にだに見えずぬる夜なければ（拾遺集巻十二、恋二、七三五、天暦の御時歌合に　順・天徳四年内裏歌合、三六四、能宣）〔河〕〔紹〕〔全巴〕恋しさを…ぬる夜なければ夢にだにみず、〔休〕〔岷〕恋しさを…慰まんぬる夜なければ夢にだにみず、〔事〕

3 あしずりといふ事をしてなくさまわかきこどものやうなり（一九三1・278）

白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消えなまし物を（伊勢物語、三・新古今集巻八、哀傷、八五一、題しらず　在

原業平朝臣、「けなましものを」〔紫〕〔異〕けなましものを

4 たゞいかさまにせむいかさまにせんとぞいはれける（一九三4・278）

①いかさまにせん〳〵とこそいはれけれ世の憂き時のひとりごとには（未詳）〔異〕、〔屋〕いかにせん〳〵といはれたる物思ふ身の

②忘るれどかく忘るれど忘られずいかさまにしていかさまにせむ（藤原義孝集、二四四六、同じ人に久しくたえて・清慎公集、二四〇〇）〔引〕わすれぬを…わすられぬ

5 むなしきからをだにみたてまつらぬがかひなくかなしくもあるかな（一九三6・281）

うつ蟬はからを見つつもなぐさめつふか草の山煙だにたて（古今集巻十六、哀傷、八三、堀川のおほきおほいまうち君身まかりける時に深草の山にをさめてける後に詠みける　僧都勝延・遍昭集、一八七七、深草の山に納め奉りしを思ひ参らせむ心のほどは思ひやるべし、「けぶりだにたて深草の山」）〔河〕〔孟〕（上句ノミ）、〔休〕（第二句ノミ）、〔紹〕〔岷〕

6 いとやさしき程ならぬをありのまゝにきこえて（一九三11・285）

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき（古今集巻十九、雑体、一〇六三、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三〇三六、「事もやさしく」）〔河〕〔孟〕

7 とのは猶いとあへなくいみじときゝ給にも心うかりけるところかな（一九四2・288）

わが庵は都のたつみつしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり（古今集巻六、雑下、九八三、題しらず　喜撰法師・古今六帖第二、山、三一六二、きせん法師、「わが宿は…人はいふらむ」）〔新〕〔集〕

8 うらやましくも心にくゝもおぼさるゝ物からまきばしらはあはれなり（一九四3・291）

わぎもこが来ては寄りたつ真木柱そもむつまじやゆかりと思へば（未詳）〔釈前〕きてもよりたつ、〔奥〕〔紫〕、〔河〕〔一〕そもむつまじき、〔弄〕（初句ノミ）、〔細〕〔休〕、〔紹〕そもむつまじみかたみと思へば、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

9 日の夕暮いとものあはれなり（一九四12・294）

唐衣ひもゆふぐれになるときはかへすゞ〳〵ぞ人は恋しき（古今集巻十一、恋一、五三五、題しらず　読人しらず）〔河〕、〔休〕人のこひしき、〔孟〕〔屋〕、〔岷〕（此歌引におよばず）、〔湖〕（第二句ノミ）、〔引〕

10 おまへちかきたちばなのかのなつかしきに（一九四12・294）

さつきまつはな橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集巻三、夏、一三九、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、橘、三三〇九、いせ・伊勢物語、一三四・和漢朗詠集巻上、夏、花橘、一四三）〔事〕

11 ほとゝぎすのふたこゑばかりなきてわたるやどにかよはゞとひとりごち給も（一九四13・294）

なき人の宿に通はばほとゝぎすかけてねにのみなくとづけ

なむ（古今集巻十六、哀傷、八三五、題しらず　読人しらず）
〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕我かくこふと鳴きてつげなん、〔釈書〕別れてこふとなきてこたへよ、〔河〕我かくこふとなきて（真本かけて音にのみ鳴と）つげなん、〔一〕なくとつげこせ、〔細〕〔休〕〔孟〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

12 しのびねや君もなくらむかひもなきしでのたおさに心かよはゞ（一九九2・294）

①いくばくの田を作ればか時鳥しでの田をさをあさな〳〵よぶ（古今集巻十六、雑体、誹諧、一〇一三、題しらず　藤原敏行朝臣）〔河〕〔孟〕〔岷〕

②死出の山越えてきつらむ時鳥恋しきひとのうへ語らなむ（拾遺集巻三十、哀傷、一三〇七、生み奉りたりけるみこのなくなりて又のとし郭公をきゝて　伊勢・伊勢集、一八二〇、かへりくる年の五月に時鳥なくを聞きてひとりごちける）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕、〔湖〕こえてやきつる、〔新〕〔評〕

13 たちばなのかほるあたりは郭公心してこそなくべかりけれ（一九九5・295）

①さつきまつはな橘の香をかげば昔のひとの袖の香ぞする（古今集巻三、夏、一三九、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、橘、三三〇九、いせ・伊勢物語、三八・和漢朗詠集巻上、夏、花橘、一三三）〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕

②古のこと語らへばほとゝぎすいかに知りてか古声のする（古今六帖第三、物がたり、三三六〇・兼輔集、一六四一、枇杷殿にまでたりければ昔物語し給ふとて北面によび合せてふるごともありける中に、「いかにしてかは」）〔事〕

14 ことにいでゝいはゞの給はねどおぼしわたるめりしを（一九三三10・302）
言に出でていはばゆゆしみ山川のたぎつ心は塞きあへにけり（万葉集巻十一、二四三三・柿本集、一三三三、「たぎつ心を堰きぞかねつる」・古今六帖第三、いはで思ふ、三三四九、人麿、「たぎつ心をせきぞかねつる」）〔河〕〔孟〕（上句ノミ）、〔引〕
いはゞやさしみ…せきぞかねつる

15 いかなることにかとまぎれつる御心もうせてせきあへ給はず（一九四7・303）
をろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへず滝つ瀬なれば（古今集巻十二、恋二、五五七、かへし　小町・小町集、一九六〇八・古今六帖第四、涙川、三三四三、小町）〔河〕〔孟〕

16 われはこゝろに身をもまかせずけむせうなるさまに（一九四8・303）
いなせともいひ放たれず憂き物は身を心ともせぬよなりけり（後撰集巻十三、恋三、九三八、親の護りける女をいなともせともいひ放てと申しければ　伊勢・伊勢集、一八二〇、人数ともせぬにそひて志いと深くありて男文おこすれど返ごともせざりければ）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〈岷〉〔河に引歌あり不及之〕

17 いかでかかならずふかきたにをももとめいでましと（一九五1・304）

世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇六一、題しらず　読人しらず）〔紫〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

18 いまはまた心うくてこのさとの名をだにえきくまじき心地し給（一九六3・305）

わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり（古今集巻十六、雑下、九八三、題しらず　喜撰法師・古今六帖第二、山、三七六一、きせん法師、「わが宿は…人はいふらむ」）〔評〕

19 いとしげきこのしたにこけをおましにてとばかりゐ給へり（一九六12・305）

①み吉野の青根が峯のこけむしろ誰か織りけむ経緯なしに（万葉集巻七、一一一〇）〔河〕〔孟〕、〔引〕青ねがみねの

②尋ねても今こそみつれちはやぶるみ山の奥の石のおましを（未詳）〔河〕〔孟〕

20 うつふし伏て侍ときこえていでこねば（一九七7・306）

世を厭ひこの本ごとに立ちよりてうつぶし染の麻のきぬなり（古今集巻十九、雑体、一〇六八、題しらず　読人しらず・遍昭集、一八九〇、「麻のけさなり」・古今六帖第二、法師、三三〇八、素性、「苔の衣ぞ」）〔河〕立ちよれば、〔孟〕〔岷〕、〔湖〕あさのけさなり、〔新〕〔集〕

21 いづれのそこのうつせにまじりけむなどやるかたなくおぼす（一九七10・306）

今日今日とわが待つ君は石川の貝に交りてありといはずやも（万葉集巻二、三四、依羅娘子）〔弄〕〔一〕〔岷〕〔湖〕（第三四句ノミ）、〔新〕〔集〕

22 まいていかなるやみにかまどはれ給らんと（一九七2・306）

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな（後撰集巻十五、雑一、一一〇五、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに　兼輔朝臣・古今六帖第二、親、三三七二、「迷ひぬるかな」・大和物語、五二・兼輔集、一六六五、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言）〔河〕（上句ノミ）、〔屋〕〔岷〕〔事〕〔評〕〔集〕

23 めのまへのなみだにくれてえきこえさせやらずなむ（一九七4・308）

行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり（後撰集巻十九、離別羇旅、一三三四、出羽よりのぼりけるにこれかれ馬のはなむけしけるにかはらけとりて　源済）〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

24 もろこししらぎのかざりをもしつべきに（一九六12・310）

新羅へか家にか帰る壱岐の島行かむたどきも思ひかねつも（万葉集巻十五、三六九六、六鯖）〔紫〕新羅つかいへにかくへる、〔異〕いへにかくへる…ゆかむたもとも思かねつる、〔河〕いへにかく（不本かゝ）かへる…ゆかんたづきも、〔孟〕いへにかくかへる…ゆかんたづきも

25 かへたらばとゆへあるかみにかきたり（一六三5・312）
草枕もみぢむしろにかへたらば心をくだくものならましや
（後撰集巻十九、羇旅、一三六五、題しらず　亭子院御製）〔弄〕
（第二句ノミ）、〔一〕、〔細〕（上句ノミ）、〔休〕ものならましを、
〔紹〕、〔全〕もみぢ衣に、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕＜玉＞〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

26 よづかぬかはのをともうれしきせもやあるとたのみしほどこそなぐさめけれ（一九四10・325）
①祈りつつ頼みぞ渡る初瀬川嬉しきせにも流れあふやと（古今六帖第三、川、三四三〇）＜弄＞、〔一〕（上句ノミ）、〔休〕
〔湖〕あひぬと思へば（第五句）、＜岷＞〔拾〕〔新〕〔事〕〔評〕
〔集〕
②こころみに猶おりたゝむ涙川うれしきせにも流れあふやと
（後撰集巻十、恋三、六三三、又　敏仲）〔引〕いざおりたゝん

27 なをいまみむはつ花のさまし給へるに（一九七4・327）
①紅のはつ花ぞめのいろふかく思ひしこゝろわれ忘れめや
（古今集巻十四、恋四、七三三、題しらず　読人しらず・古今六帖第三、くれなゐ、三四三五、「色衣…我は忘れず」〔休〕
②高砂の　さいささごの　高砂の　尾上に立てる　白玉　玉
椿　玉柳　それもがと　さむ　汝もがと　汝もがと　練緒
染緒の　御衣架にせむ　玉柳　何しかも　さ　何しかも
何しかも　心もまたいけむ　百合花の　さ百合花の　今朝
咲いたる　初花に　あはましものを　さゆり花の（催馬楽、
高砂、三）〔拾〕

③待つ人の今見えたらば疾き花を押し折り取れる心地こそせめ（古今六帖第三、めづらし、三七九〇）〔拾〕初花を（第三句）

28 そもむつまじく思きこゆべきゆへなき人の（一九八3・328）
わぎもこがきてはよりたつまきばしらそもむつまじやゆかりと思へば（未詳）〔紫〕〔異〕、〔河〕〔全〕〔岷〕（第二三四句ノミ）、〔弄〕（初句ノミ）、〔一〕（初句ノミ、かならず相叶ざるべし）、＜休＞〔屋〕〔拾〕

29 女郎花みだるゝ野辺にまじるとも露のあだなをわれにかけめや…花といへばなこそあだなれをみなへしなべての露にみだれやはする（一九六12・329）
女郎花多かる野べに宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ（古今集巻四、秋上、二九、題しらず　小野美材・古今六帖第六、女郎花、三四〇九、小野よしき・寛平御時后宮歌合、三四三四、小野美材、「匂へる野辺に」・和漢朗詠集巻上、秋、女郎花、二八、野美材、「名をやたつべき」）〔異〕大原野べに…名をやながさん、〔河〕、〔休〕名をやたゝまし、〔紹〕
〔全〕、〔岷〕名をやたてなん、〔引〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

30 わきてもかの御ものはぢのゆへかならずありぬべきおりにぞあめるとて（一九九10・330）
暮に逢ひて朝面無み隠野の萩は散りにき黄葉早続げ（万葉集巻八、一五六、縁達師）〔新〕（上句ノミ）

31 なかについてはらわたたゆるは秋の天といふ事を（一九九14・330）
いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりけ

る（古今集巻四、秋上、一八六、これさだのみこの家の歌合の歌　読人しらず・宗于集、一六五六、物思ふ頃ひとりごとに・小町集、一九六〇）〔岷〕

32 宮の君はこの西のたいにぞ御かたしたりける（一九六一5・333）
誰により松をもひかむ鶯の初音かひなきけふにもあるかな
（拾遺集巻十六、雑春、一〇三、東三条院の御四十九日のうちに子日いできたりけるに宮の君と云ひける人のもとに遣はしける　右衛門督公任・前大納言公任卿集、三三〇六、女院うせ給ひて又の年二月初子の日女房の許に、「誰にとか」）
〔河〕〔岷〕

33 まめやかになむことよりほかをもとめられ侍との給へば（一九二12・334）
思ふてふことより外に又もがな君一人をばわきて忍ばむ
（古今六帖第五、わきて思ふ、三四六）〔紫〕君ばかりをばねわきてしのばん、〔異〕〔河〕〔細〕〔紹〕〔孟〕君ばかりをば、〔花〕〔初句ノミ、〔休〕ことより外を…君ばかりをも、〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

34 まつもむかしのとのみながめらるゝにも（一九六三5・335）
たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに（古今集巻七、雑上、九〇九、題しらず　藤原興風・古今六帖第六、松、三四九四、興・興風集、一六七六・和漢朗詠集巻下、交友、七四〇）〔釈前〕、〔奥〕（上句ノミ、「ふるさとの」）、〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔湖〕（上句ノミ、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

35 ありとみて手にはとられずみれば又ゆくゑもしらずきえしかげろふ（一九四4・336）
①哀ともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬる世なれば（後撰集巻十六、雑二、一二九二、題しらず　読人しらず）
〔花〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔全〕
②あると見て頼むぞ難きかげろふのいつともしらぬ身とはしるしる（古今六帖第一、かげろふ、三一七〇二）〔花〕ありと見て、〔休〕ありとみて…いつとはしらぬ、〔孟〕、〔岷〕ありと見てたのむにかたき、〔湖〕〔新〕ありと見て…いつともわかぬ
③目には見て手には取られぬ月のうちの桂の如き君にぞありける（伊勢物語、一四八・古今六帖第六、桂、三三三、「妹にもあるかな」）〔玉〕ありと見て…君にもあるかな、〔大〕
④ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしどや思ひなしてむ（古今集巻十、物名、四四三、をばな　読人しらず）
〔玉〕

36 あるかなきかのとれいのひとりごち給とかや（一九四4・336）
①たとへてもばかなきものは世の中のあるかなきかの身にこそ有けれ（未詳）〔釈前〕、〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔河〕〔一〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕かげろふの（第三句）…世にこそありけれ、〔異〕あさがほの…身にぞありける、〔紹〕〔対〕〔大〕
②世の中はそれかあらぬかかげろふのあるかなきかとわきぞかねつる（未詳）〔異〕
③夏の月光をまして照る時は流るゝみづにかげろふぞ立つ

（古今六帖第一、夏の月、三二六）〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕

④かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞぬれぬる（古今集巻十四、恋四、七三一、題しらず　読人しらず）

〔河〕〔孟〕〔岷〕袖ぞぬれける、〔休〕〔屋〕

⑤かげろふのさやにこそみめぬば玉の夜のひとめは恋しかりけり（古今六帖第一、かげろふ、三六九）〔河〕むば玉の、〔孟〕むば玉のよるのみ人は、〔岷〕

⑥かげろふのほのめきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身をたどりつる（後撰集巻十二、恋四、八三七、女につかはしける　読人しらず）〔河〕〔岷〕

⑦世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞありける（後撰集巻十六、雑四、一三六五、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、かげろふ、三六九七、「思ひし物を…世にこそありけれ」）〔新〕思ひしものを、〔集〕

⑧哀ともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬる世なれば（後撰集巻十六、雑二、一二九二、題しらず　読人しらず）

〔対〕〔大〕〔集〕

⑨ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ（古今集巻十、物名、四四三、をばな　読人しらず）

〔大〕

手　習

1 やどもりのをのこをよぶ山びこのこたふるもいとおそろし（一九九二2・343）

つれもなき人を恋ふとて山彦の答へするまで歎きつるかな（古今集巻十一、恋一、五三一、題しらず　読人しらず・古今六帖第二、山びこ、三八六六・亭子院歌合、三五〇〇）〔河〕〔孟〕

〔岷〕

2 一とせたらぬつくもがみおほかる所にて（二〇〇二14・357）

百年に一年たらぬつくもがみ我を恋ふらし面影に見ゆ（伊勢物語、二九）〔釈前〕〔異〕おも影にたつ、〔奥〕〔紫〕〔河〕〈花〉〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕、〔湖〕（第二句ノミ）、〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

3 世中になをありけりといかで人にしられじ（二〇〇三8・358）

いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむこともはづかし（古今六帖第五、名を惜む、三九〇三）〔拾〕〔事〕

4 身をなげし涙の河のはやき瀬をしがらみかけてたれかとゞめし（二〇〇五5・359）

①流れ行く我はみくづとなりはてぬ（にイ）（ぬともイ）君しがらみになりてとどめよ（大鏡巻三、八八九、菅原道真）〔紫〕〔異〕、〔河〕〔孟〕〔引〕

なりぬとも、〔岷〕〔湖〕〔対〕〔事〕

②涙川おつる水上早ければ堰きぞかねつる袖のしがらみ（貫之集、一七六二・拾遺集巻十四、恋四、八七六、題しらず　貫之・

古今六帖第三、しがらみ、三四九）〔拾〕しがらみかけてせく袖ぞなき

③明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし（万葉集巻三、一九七、柿本朝臣人麿・拾遺集巻八、雑上、四九六、あすかの女王ををさむる時よめる　人麿、「のどけからまし」）〔拾〕

5 みめも心ざまもむかしみし宮こどりにゝたるはなし（二〇〇六7・360）

名にし負はゞいざこととはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと（古今集巻九、羇旅、四一一、武蔵国と下総のくにとの中にある角田川のほとりに到りて都のいと恋しうおぼえければしばし川のほとりにおりゐて思ひやれば限りなくとほくも来にけるかなと思ひわびてながめをるに渡守はや舟にのれ日も暮れぬといひければ舟にのりて渡らむとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらずさる所に白き鳥のはしと足と赤き川のほとりに遊びけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見知らず渡守にこれは何鳥ぞと問ひければこれなむ都鳥といひけるを聞きてよめる　在原業平朝臣・伊勢物語、九・古今六帖第三、都どり、三二〇四・業平、業平集、一六一三）〔業〕〔異〕〔河〕〔屋〕〔岷〕、〔湖〕（第二句ノミ）、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

6 世中にあらぬ所はこれにやとぞかつは思なされける（二〇〇六8・360）

世の中にあらぬところもえてしがな年ふりにたるかたち隠さむ（拾遺集巻八、雑上、五〇六、題しらず　読人しらず）〔花〕年すぎにたる、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

7 かきほにうへたるなでしこもおもしろく（二〇〇七2・361）

あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ（古今集巻十四、恋四、六九五、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、なでしこ、三四七六・和泉式部日記、五六〇、「垣穂に生ふる」）〔異〕〔拾〕垣ほにおふる、〔事〕

8 忘がたみをだにとゞめ給はずなりにけんと（二〇〇八5・362）

①さくら色に衣は深くそめてきむ花のちりなむ後の形見に（古今集巻一、春上、六六、題しらず　紀ありとも・古今六帖第六、さくら、三五〇四）〔河〕そをだにのちの、＜岷＞（不及引歌）

②結び置きし形見のこだになかりせば何に忍ぶの草をつまゝし（後撰集巻十六、雑二、一二八、兼忠朝臣の母みまかりにければ兼忠をば故枇杷左大臣の家にむすめをばきさいの宮にさぶらはせむとあひ定めて二人ながらまづ枇杷の家に渡し送るとてくはへはべりける　兼忠朝臣の母のめのと・古今六帖第五、かたみ、三九七九）〔紹〕

9 まへちかきをみなへしをおりてなににほふらんとくちずさびてひとりごちたてり人の物いひさすがにとがむるこそなどこだいの人どもは物めでをしあへり（二〇一〇3・365）

ここにしも何にほふらむ女郎花人のもの言ひさがにくき世に（拾遺集巻十七、雑秋、一〇九六、房の前栽見に女どもまうで

来りければ　僧正遍昭・遍昭集、一八八七、嵯峨に侍りし法師の坊の前に前栽のはべりけるを女どものたちとまりて見侍りしかば　〔釈前〕おひなへし、〔釈書〕〔奥〕、〔紫〕ここにして、〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕＜玉＞〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

10 八月十余日のほどにこたかがりのついでにおはしたり（二〇一三6・369）

①石瀬野に秋萩凌ぎ馬並めて初鷹狩だにせずや別れむ（万葉集巻十九、四二九）〔河〕駒なめて小鷹がりだにせでや別れん、〔孟〕〔湖〕駒なべて小鷹がりだにせでやわかれん、〔岷〕駒なべてこ鷹狩だにせでやゝみなん

②秋の野にかりぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿はかさなむ（貫之集、一三三〇、小鷹狩・古今六帖第二、小鷹狩、三二〇六一）〔河〕〔孟〕〔岷〕

11 あま君まつちの山となんみ給ふるとひいだし給（二〇一三7・369）

①いつしかと待乳の山の桜花まちてもよそにきくが悲しさ（後撰集巻十八、雑四、一三三六、遠き国に侍りける人を京に上りたりと聞きてあひまつにまうできながらとはざりければ読人しらず）〔紫〕まちいでゝよそに

②誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし（小町集、一九六六）〔紫〕、〔異〕いつしかと…人もある世に、〔河〕〔孟〕秋をちぎれる、＜花＞、〔弄〕〔初句ノミ、〔一〕、〔細〕人もあるらし、〔休〕〔紹〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

12 いとうたゝあるまで世をうらみ給めれば（二〇一三14・370）花と見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇一六、題しらず　読人しらず・遍昭集、一八八九）〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔屋〕名こそありけれ、〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕

13 あな心うあきを契れるはずかし給にこそ有けれ（二〇一四6・371）誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし（小町集、一九六六）〔引〕（第二句ノミ）

14 松虫のこゑをたづねてきつれどもまた萩はらの露にまどひぬ（二〇一四8・371）秋の野に人まつ虫の声すなり我かと行きていざとぶらはむ（古今集巻四、秋上、二〇三、題しらず　読人しらず）〔休〕〔紹〕

15 しのびやかにふゑをふきならしてしかのなくねになどひとりどつけはひ（二〇一五9・372）山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴くねにめをさましつつ（古今集巻四、秋上、三四、是貞のみこの家の歌合の歌　忠岑・古今六帖第二、山里、三八五六・忠岑集、一九三三、「悲しけれ」）〔釈前〕、〔釈書〕かなしけれ（第三句）、〔奥〕〔紫〕、〔異〕まさりけれ、〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 みえぬ山ぢにもえ思なすまじうなんと（二〇一五12・372）①世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ（古今集巻十八、雑下、九五五、おなじ文字なき歌　物部

よしな）〔釈前〕みえぬ山ぢに、〔奥〕〔紫〕〔異〕、〔河〕〔湖〕（上句ノミ）、〔弄〕（初句ノミ）、〔一〕〔玉〕（第二句ノミ）、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②人めだに見えぬ山路にたつ雲をたれ炭がまの煙りといふらむ（後撰集巻十八、雑四、一三六、題しらず　北辺左大臣・古今六帖第二、炭がま、三九〇一、まとの左大臣）〔異〕

17 あたらよを御らんじさしつるとてゐざりいで給へり（二〇一五13・372）

あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや（後撰集巻三、春下、一〇三、月の面白かりける夜花を見て源信明・信明集、二〇一五三、いきたるにあはねば、「哀しれらん」）〔釈前〕、〔紫〕心しられん、〔異〕あはれしれらん、〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔屋〕人に見せなん、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

18 たけふちゝり〳〵たりたんなゝどかきかへしはやりかにひきたる（二〇一八2・375）

①笛の音の春面白く聞こゆるは花ちりたりとふけばなりけり（後拾遺集巻三十、雑体、誹諧、二一〇〇、題しらず　読人しらず）〔花〕〔一〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔大〕

②道の口　武生の国府に　我はありと　親に申したべ　心あひの風や　さきむだちや（催馬楽、道の口、二〇）〔事〕

19 おぎのはにをとらぬほど〳〵にをとづれわたる（二〇一九3・376）

秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてまし（後撰集巻十二、恋四、八四七、平かねきがやう〳〵かれがたになりにければつかはしける　中務）〔拾〕

20 命さへ心にかなはずたぐひなきにいみじきめをみるはと（二〇二〇2・377）

命さへ心にかなふものならば何か別れのかなしからまし（古今集巻八、離別、三八七、源のさねがつくしへ湯あみむとて罷りける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる　しろめ・大和物語、六五五・古今六帖第四、別、三三〇七、「悲しかるべき・和漢朗詠集巻下、餞別、六四〇）〔河〕〔孟〕、〔屋〕命さへ…かなしかるべき、〔岷〕（私不足引歌）

21 はかなくて世にふる河のうきせには尋もゆかじ二もとの杉…ふる河の杉の本だちしらねども過にし人によそへてぞみる（二〇二〇7・378）

はつせ川ふる川のべにふたもとある杉年を経てまたもあひみむ二本ある杉（古今集巻十九、雑体、施頭歌、一〇〇九、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、せんとう歌、三三六五・躬恒集、一五四九、頭べを旋らす歌、「年をへて二本ある杉…おも変りせで」）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕（第二句ノミ）、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

22 しみつかんことのやうにおぼしめしたるとそ（二〇二一5・380）

笹の葉におく初霜のよを寒みしみはつくとも色に出でめや（古今集巻十三、恋三、六六三、題しらず　躬恒・古今六帖第一、霜、三三五六、「置きゐる霜の寒ければしみはしつとも」・同第三、人知れぬ、三三〇八・躬恒集、一五四七）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕

23 れいの心よはさはひとつばしあやうかりてかへりきたりけ

ん物のやうに（二〇三14・382）
津の国の難波の浦の一つ橋君をしもへばあからめもせず
（古今六帖第三、橋、三四六八）〔拾〕、〔新〕君をしおもへば、
〔大〕

24 はじめよりうすきながらものどやかに物し給し人は（二〇三6・383）
夏衣うすきながらぞ頼まるゝ一重なるしも身に近ければ
（拾遺集巻十三、恋三、八三、題しらず　よみ人しらず）〔河〕
〔休〕〔屋〕〔引〕

25 鳥のなくをきゝていとうれしはゝの御こゑをきゝたらむはましていかならむと（二〇三10・384）
山鳥のほろ〳〵となく声きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ
（玉葉集巻十九、釈教、二六一四、山鳥のなくを聞きて　行基菩薩）
〔花〕、〈細〉〔引歌にをよぶべからず〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕、
〔屋〕ほろ〳〵と鳴山鳥の…父かとも思ふ母かとも思ふ、
〔岷〕〔湖〕〔全〕〔対〕〔大〕〔集〕

26 かゝれとてしもひとりごちる給へり（二〇三17・385）
たらちねはかかれとてしもうば玉のわが黒髪をなでずやありけむ（遍昭集、一八七五、何くれといひありき侍りし程に仕うまつりし深草の帝崩れおはしまして変らむ世をみむもたへ難く悲し蔵人頭中将などいひて夜昼なれ仕うまつりしなごりなからむ世にも交らじとて俄に家に人々にも知らせでひえに登りて頭おろし侍りしにもさすがに親などのことは心にやかかりけむ・後撰集巻十七、雑三、一二四一、はじめて頭おろし侍りける時物にかきつけ侍りける　遍昭、「たらちめは」・和漢朗詠集巻下、僧、六一〇）〔釈前〕わがくろかみは、〔釈書〕たらちめは…むば玉の我くろかみは、〔奥〕
たらちねロれ、〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕
（第二句ノミ、〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕）

27 我も今は山ぶしぞかしことはりにとまらぬ涙なりけりと（二〇三2・398）
何れをか雨ともわかむ山伏の落つる涙もふりにこそふれ
（後撰集巻十六、雑二、一二三、戒仙が深き山寺に籠り侍りけるにこと法師詣できて雨に降りこめられて侍りけるに　読人しらず・素性法師集、一五九八、山寺に籠りて哀なることを云ひてよるとまりてうち泣きなどし侍る程に雨降りければ、「夜はにこそふれ」・古今六帖第二、法師、三三〇三、「ありともわかむ…淵とこそなれ」）〔一〕わぶる涙は、〔湖〕わがる涙は

28 このいとふにつけたるいらへはし給はず（二〇四7・402）
にくさのみますだの池のねぬなはゝいとふにはゆる物にぞありける（未詳）〔紫〕〔異〕

29 すべてくちきなどのやうにて人にみすてられてやみなむともてなし給（二〇四8・402）
形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ（古今集巻十七、雑上、八三五、女どもの見て笑ひければよめる
兼芸法師・古今六帖第二、法師、三三〇〇、けうぜい法師）
〔紫〕〔異〕、〔河〕（上句ノミ、〔孟〕

30 雪深くふりつみ人めたえたる比ぞげに思やるかたなかりける（二〇四13・402）

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ（古今集巻六、冬、三八、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌 壬生忠岑・忠岑集、一九七三・古今六帖第一、雪、三三六六）〔岷〕〔湖〕〔全〕

31 年もかへりぬ春のしるしもみえずこほりわたれる（二〇四13・402）

いづことも春の光はわかなくにまだみ吉野の山は雪ふる（後撰集巻一、春上、一九、おなじ御時みづし所にさぶらひけるころしづめる由を歎きて御覧ぜさせよとおぼしくてある蔵人におくりて侍りける十二首がうち 躬恒・躬恒集、一五三七、延喜のおほんときに御厨子どころにさぶらひしに京官のころともにおくれたりしかば御らんぜさせよとおもひて或るをんなくらうどのもとにやりし）〔休〕〔紹〕いづくとも春のしるしはみえなくに

32 かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞけふもかなしき（二〇四12・403）

ももしきの大宮人は暇あれや桜かざしてこゝにつどへり（古今六帖第四、かざし、三三一五、人麿・万葉集巻十、一八六三、「梅をかざして」・新古今集巻二、春下、一〇四、題しらず、山辺赤人、「今日もくらしつ」・和漢朗詠集巻上、春、春興、三五）〔岷〕けふもくらしつ

33 雪ふかき野べのわかなも今よりは君がためにぞ年もつむべき（二〇四18・403）

君がため春の野に出でゝ若菜つむわが衣でに雪は降りつゝ（古今集巻一、春上、三、仁和のみかどみこにおはしましける時人に若菜たまひける御歌 読人しらず・古今六帖第一、若菜、三〇九三、仁和の帝の御歌）〔一〕（第二句ノミ）、〔評〕〔集〕

34 こうばいの色も香もかはらぬを春や昔のとこと花よりも（二〇四10・403）

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして（古今集巻十五、恋五、七四七、五条の后の宮の西の対に住みける人にほいにはあらでものいひ渡りけるを睦月の十日あまりになむ外へ隠れにけるあり所は聞きけれどえ物もいはで又の年の春梅の花ざかりに月の面白かりける夜去年をこひてかの西の対にいきて月の傾くまであばらなる板じきにふせりてよめる 在原業平朝臣・伊勢物語、二〇・古今六帖第五、昔をこふ、三三七五〇、業平・業平集、一六一四五）〔釈前〕、〔奥〕〔休〕〔孟〕（第二句ノミ）、〔紫〕〔異〕、〔河〕〔一〕〔湖〕（上句ノミ）、〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

35 これに心よせのあるはあかざりしにほひのしみけるにや（二〇四11・403）

あかざりし君が匂ひの恋しさに梅の花をぞ今朝は折りつる（拾遺集巻十六、雑春、一〇〇五、正月に人々まうで来りけるに又の日のあしたに右衛門督公任の朝臣のもとに遣はしける

中務卿具平親王・前大納言公任卿集、三六〇、中務の宮にて人々酒のみしつとめて宮の聞え給ふける・為頼朝臣集、二四三九、正月十三日ひとひ参り給へりしのち左兵衛督の宮にまゐらせ給ふ）〔紫〕、〔異〕梢の花をぞ、〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔屋〕けさは折りつゝ、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

36 袖ふれし人こそみえね花の香のそれかと匂ふ春の明ぼの（二〇四―14・403）

色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも（古今集巻一、春上、三三、題しらず　読人しらず）〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

夢浮橋

1 いむことなどさづけ給てけりときゝ侍ればまことかまだとしもわかく（二〇五―3・418）

陸奥の安達の原の黒づかに鬼こもれりといふはまことか（拾遺集巻九、雑下、五五九、みちのくに名取のこほりくろづかといふ所に重之がいもうとあまたありと聞きていひ遣はしける　兼盛）〔拾〕聞くはまことか

2 さりがたきほだしにおぼえはべりてかゝづらひ侍つるほどに（二〇六―1・424）

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ（古今集巻十六、雑下、九五五、おなじ文字なき歌　物部よしな）〔事〕

3 いとふかくしげりたるあをばのやまにむかひて（二〇六―3・425）

①紅葉する秋は来にけり水鳥の音羽の山の色づく見れば（古今六帖第三、水鳥、三三八）〔岷〕

②秋の露は移にありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば（万葉集巻八、一五四三、三原王・古今六帖第二、山、三七九七、三原のおほきみ、「白露はうつしなりけり…音羽の山の」）〔拾〕

4 ありしながらの御てにてかみのかなど（二〇六―5・432）

とりかへす物にもがなや世の中をありしながらの我が身と思はん（未詳）〔河〕〔休〕〔孟〕、〔岷〕（不及引歌）

5 いそがるゝ心のわれながらもどかしきになん（二〇六9・433）
われながらさももどかしき心かな思はぬ人は何か恋しき
（拾遺集巻十二、恋二、七五九、題しらず　読人しらず）〔異〕
〔引〕

6 くものはるかにへだゝらぬほどにも侍めるを（二〇七6・435）
あふことは雲居遥かになる神の音にきゝつゝ恋ひわたるかな（古今巻集十一、恋一、四八二、題しらず、貫之・貫之集、一七七三、「恋ひやわたらむ」・古今六帖第一、鳴神、三六七、「恋ひやわたらむ」）〔釈前〕〔紫〕〔異〕〔花〕〔休〕〔孟〕〔岷〕恋やわたらん、〔奥〕世をやわたらん、〔紹〕〔引歌不及〕、〔湖〕
〔第二句ノミ〕、〔引〕

7 やまかぜふくとも又もかならずたちよらせ給なんかし（二〇七7・435）
はつせ川ふる川のべにふたもとある杉としをへてまたもあひみむ二本ある杉（古今集巻十九、旋頭歌、一〇〇九、題しらず読人しらず・古今六帖第四、せんとう歌、三三六五・躬恒集、一五八九、頭べを旋らす歌、「年をへて二本ある杉…おも変りせで」）〔異〕